

趣味の遺伝

夏目漱石

青空文庫

陽氣のせいで神も氣違きちがひになる。「人を屠ほふりて餓うえたる犬を救え」と雲の裡うちより叫ぶ声が、逆さかしまに日本海を撼うごかして満洲の果まで響き渡った時、日人と露人ははつと応こたえて百里に余る一大屠場とじょうを朔北さくほくの野やに開いた。すると渺々びようびようたる平原の尽くる下より、眼にあまる狗いぬの群むれが、腥なまぐさき風を横に截きり縦に裂いて、四つ足の銃丸を一度に打ち出したように飛んで来た。狂える神が小躍りして「血を啜すすれ」と云うを合図に、ぺらぺらと吐ほくの舌は暗き大地を照らして咽喉のどを越す血潮の湧わき返る音が聞えた。今度は黒雲の端はじを踏み鳴らして「肉を食くらえ」と神が号さけぶと「肉を食え！ 肉を食え！」と犬共も一度に咆ほえ立てる。やがてめりめりと腕を食い切る、深い口をあけて耳の根まで胴にかぶりつく。一つの脛すねを啣くわえて左右から引き合う。ようやくの事肉は大半平げたと思うと、また冪々べきべきたる雲を貫つらぬいて恐しい神の声がした。「肉の後には骨をしゃぶれ」と云う。すわこそ骨だ。犬の歯は肉よりも骨を嚙かむに適している。狂う神の作った犬には狂った道具が具そなわっている。今日の振舞を予期して工夫してくれた歯じや。鳴らせ鳴らせと牙きばを鳴らして骨にかかる。

ある者は搥くじいて髓ずいを吸い、ある者は砕いて地に塗まる。齒はの立たぬ者は横よこにこいて牙きばを磨とぐ。怖こわい事ことだと例れいの通り空想くわうに耽ふけりながらいつしか新橋しんばしへ来た。見ると停車場ていじやう前の広場ひろばはいっぱいの人ひとで凱旋門がいせんもんを通して二間にまばかりの路みちを開ひらいたまま、左右さゆうには割り込む事ことも出来ないほど行列けつぎしている。何なにだろう？

行列けつぎの中には怪あやし気げな絹シルク帽ハットを阿弥陀あみだに被かぶつて、耳みみの御蔭ごかげで目隠めかくしの難がたを喰くい止とめているのもある。仙台平せんたいひらを窮屈きゆうくつそうに穿はいて七子ななこの紋付もんづけを人の着物きもののようにいじろじろ眺ながめているのもある。フロック・コートは承知しやうちしたがズツクの白い運動靴うんどうくつをはいて同じく白の手袋てぶきをちよつと見たまえと云いわぬばかりに振り廻まわしているのは奇観きかんだ。そうして二十人に一本いっぴんずつくらいの割合わりあひで手頃てぐらな旗はたを押し立てている。大抵むらさきは紫むらさきに字あざを白く染ぞめ抜ぬいたものだが、中には白地に黒々と達筆たつひつを振ふるつたのも見える。この旗はたさえ見たらこの群集ぐんしゆの意味いみも大たい概がい分ぶんるだろうと思おもつて一番いちばん近いのを注意ちゆういして読よむと木村六之助君きむらむつしゆの凱旋がいせんを祝いわす連れ雀たひな町ちやう有志者ゆうししやとあつた。ははあ歓迎かんげいだと始めて気がついて見ると、先刻さつぎの異装紳士いしやうしんしも何なにとなく立派りつぱに見えるような気がする。のみならず戦争せんじやうを狂神きやうしんのせいのように考えたり、軍人ぐんじんを犬いぬに食くわれに戦地せんちへ行くように想像さうぞうしたのが急に氣きの毒どくになつて来た。実は待ち合あひす人があつて停車場ていじやうまで行くのであるが、停車場ていじやうへ達たするには是非ぜひ共ともこの群集ぐんしゆを左右さゆうに見

て誰も通らない真中をただ一人歩かなくつてはならん。よもやこの人々が余の詩想を洞見しはしまいが、たださえ人の注視をわれ一人に集めて往來を練って行くのはきまりが悪るいのに、犬に喰い残された者の家族と聞いたら定めし怒る事であろうと思うと、一層調子が狂うところを何でもない顔をして、急ぎ足に停車場の石段の上まで漕ぎつけたのは少し苦しかった。

場内へ這入つて見るとここも歡迎の諸君で容易に思う所へ行けぬ。ようやくの事一等の待合へ来て見ると約束をした人は未だ来ておらぬらしい。暖炉の横に赤い帽子を被つた士官が何かしきりに話しながら折々佩劍をがちやつかせている。その傍に絹帽が二つ並んで、その一つには葉巻の煙りが輪になつてたなびいている。向うの隅に白襟の細君が品のよい五十恰好の婦人と、傍きの人には聞えぬほどな低い声で何事か耳語している。ところへ唐棧の羽織を着て烏打帽を斜めに戴いた男が来て、入場券は貰えませんが改札場の中はもういっぱいですと注進する。大方出入の者であろう。室の中央に備え付けたテーブルの周囲には待ち草臥れの連中が寄つてたかつて新聞や雑誌をひねくつている。真面目に読んでるものは極めて少ないのだから、ひねくつていると云うのが適當だろう。

約束をした人はなかなか来ん。少々退屈になつたから、少し外へ出て見ようかと室の戸

口をまたぐ途端に、背広を着た髻のある男が擦れ違ひながら「もう直です二時四十五分ですから」と云った。時計を見ると二時三十分だ、もう十五分すれば凱旋の将士が見られる。こんな機会は容易にない、ついでだからと云つては失礼かも知れんが實際余のように図書館以外の空気をあまり吸つた事のない人間はわざわざ歓迎のために新橋までくる折もあるまい、ちようど幸だ見て行こうと了見を定めた。

室を出て見ると場内もまた往來のように行列を作つて、中にはわざわざ見物に来た西洋人も交つている。西洋人ですらくるくらいなら帝国臣民たる吾輩は無論歓迎しなくてはならん、万歳の一つくらいは義務にも申して行こうとようやくの事で行列の中へ割り込んだ。

「あなたも御親戚を御迎いに御出になつたので……」

「ええ。どうも気が急くものですから、つい昼飯を食わずに来て、……もう二時間半ばかり待ちます」と腹は減つてもなかなか元氣である。ところへ三十前後の婦人が来て

「凱旋の兵士はみんな、ここを通りましようか」と心配そうに聞く。大切の人を見はぐつては一大事ですと云わぬばかりの決心を示している。腹の減つた男はすぐ引き受けて

「ええ、みんな通るんです、一人残らず通るんだから、二時間でも三時間でもここにさえ

立つていれば間違いつこありません」と答えたのはなかなか自信家と見える。しかし昼飯も食わずに待つていろとまでは云わなかつた。

汽車の笛ふえの音を形容して喘ぜんそく息病みの鯨くじらのようだと云つた仏蘭西フランスの小説家があるが、なるほど旨い言葉だと思ふ間もなく、長蛇のごとく蜿蜒のたくつて来た列車は、五百人余の健児を一度にプラットフォームの上に吐き出した。

「ついたようですぜ」と一人が領くびを延のばすと

「なあに、ここに立つてさえいれば大丈夫」と腹の減つた男は泰然として動どうずる景色けしきもない。この男から云うと着いても着かなくても大丈夫なのだろう。それにしても腹の減つた割には落ちついたものである。

やがて一二丁向うのプラットフォームの上で万歳！ と云う声が聞える。その声が波動のように順送りに近づいてくる。例の男が「なあに、まだ大丈夫……」と云い懸かけた尻尾しっぽを埋うずめて余の左右に並んだ同勢は一度に万歳！ と叫んだ。その声の切れるか切れぬうちに一人の将軍が拳手の礼を施しながら余の前を通り過ぎた。色の焦やけた、胡麻塩髯ごましおひげの小作こづくりな人である。左右の人は将軍の後あとを見送りながらまた万歳を唱となえる。余も——妙な話しだが実は万歳を唱えた事は生れてから今日こんにちに至るまで一度もないのである。万歳を唱え

てはならんと誰からも申しつけられた覚おぼえは毛頭もうとうない。また万歳を唱えては悪わるいと云う主義でも無論ない。しかしその場に臨んでいざ大たい声せいを発しようとすると、いけない。小石で気管を塞ふさがれたようでどうしても万歳が咽喉のど笛ふえへこびりついたぎり動かない。どんなに奮発しても出てくれない。——しかし今日は出してやろうと先刻さつきから決心していた。実は早くその機ががくればよいがと待ち構えたくらいである。隣りの先生じやないが、なあに大丈夫と安心していたのである。喘息病みの鯨ほが吼ほえた当時からそら来たなとまで覚悟をしていたくらいだから周囲のものがワーと云うや否や尻しりうま馬うまについてすぐやろうと実は舌の根まで出しかけたのである。出しかけた途端に將軍が通った。將軍の日に焦やけた色が見えた。將軍の髻ひげの胡麻塩ごましおなのが見えた。その瞬間に出しかけた万歳がびたりと中止してしまつた。なぜ？

なぜか分るものか。なにゆえとかこのゆえとか云うのは事件が過ぎてから冷静な頭脳に復したとき当時を回想して始めて分解し得た智識に過ぎん。なにゆえが分るくらいなら始めから用心をして万歳の逆戻りを防いだはずである。予期出来ん咄とつさ嗟さの働ときに分別とが出るものなら人間の歴史は無事なものである。余の万歳は余の支配権以外に超然として止とまつたと云わねばならぬ。万歳がとまると共に胸うちの中に名状しがたい波動が込み上げて来て、

両眼から 一 雫 ばかり涙が落ちた。

將軍は生れ落ちてから色の黒い男かも知れぬ。しかし 遼 東の風に吹かれ、奉天の雨に打たれ、沙河の日に射り付けられれば大抵なものは黒くなる。地体黒いものはなお黒くなる。髻もその通りである。出征してから 白銀の筋は幾本も殖えたであろう。今日始めて見る我らの眼には、昔の將軍と今の將軍を比較する材料がない。しかし指を折って日夜に待侘びた夫人令嬢が見たならば定めし驚くだろう。戦は人を殺すかさなくば人を老いしむるものである。將軍はすこぶる瘠せていた。これも苦勞のためかも知れん。して見ると將軍の 身体中 で出征前と変らぬのは身の丈くらいなものであろう。余のごときは黄 巻 青 帙の間に起臥して書齋以外にいかなる出来事が起るか知らんでも済む天下の逸民である。平生戦争の事は新聞で読まんでもない、またその状況は詩的に想像せんでもない。しかし想像はどこまでも想像で新聞は横から見ても縦から見ても紙片に過ぎぬ。だからいくら戦争が続いても戦争らしい感じがしない。その気楽な人間がふと停車場に紛れ込んで第一に眼に映じたのが日に焦けた顔と霜に染った髻である。戦争はまのあたりに見えぬけれど戦争の結果——たしかに結果の一片、しかも活動する結果の一片が 眸底を掠めて 去った時は、この一片に誘われて満洲の大野を蔽う大戦争の光景がありありと脳裏に描

出しゅつせられた。

しかもこの戦争の影とも見るべき一片の周囲を繞めぐる者は万歳と云う歓呼の声である。この声がすなわち満洲の野やに起つた咄とつ喊かんの反響である。万歳の意義は字のごとく読んで万歳に過ぎんが咄喊となるとだいたい趣おもむきが違ちがう。咄喊はワーと云うだけで万歳のように意味も何もない。しかしその意味のないところに大変な深い情じやうが籠こもっている。人間の音声には黄色いのも濁つたのも澄んだのも太いのも色々あつて、その言語調子もまた分類の出来んくらい区々まちまちであるが一日二十四時間のうち二十三時間五十五分までは皆意味のある言葉を使っている。着衣の件、喫飯きつぱんの件、談判の件、懸引かけひきの件、挨拶あいさつの件、雑話の件、すべて件と名のつくものは皆口から出る。しまいには件がなければ口から出るものは無いとまで思う。そこへもつて来て、件のないのに意味の分らぬ音声を出すのは尋常ではない。出しても用の足りぬ声を使うのは経済主義から云うても功利主義から云つても割に合わぬにきまつている。その割に合わぬ声を不法法に他人様の御間おききに入れて何らの理由もないのに罪もない鼓膜こまくに迷惑を懸かけるのはよくせきの事でなければならぬ。咄喊とつかんはこのよくせきを煎せんじ詰めて、煮詰めて、缶詰かんづめにした声である。死ぬか生きるか娑婆しゃばか地獄かと云う際きわどい針線はりがねの上に立つて身震みぶるいをするとき自然と横膈膜おうかくまくの底から湧わき上がる至誠の声

である。助けてくれと云ううちに誠はあろう、殺すぞと叫ぶうちにも誠はない事もあるまい。しかし意味の通ずるだけそれだけ誠の度は少ない。意味の通ずる言葉を使うだけの余裕分別のあるうちは一心不乱の至境に達したとは申されぬ。咄喊にはこんな人間的な分子は交つておらん。ワーと云うのである。このワーには厭味いやみもなければ思慮もない。理もなければ非もない。詐りいつわもなければ懸かけひき引もない。徹頭徹尾ワーである。結晶した精神が一度に破裂して上下四圍の空気を震しんとう盪とうさしてワーと鳴る。万歳の助けてくれの殺すぞのとそんなけちな意味を有してはおらぬ。ワーその物が直ただちに精神である。霊である。人間である。誠である。しかして人界崇高の感は耳を傾けてこの誠を聴き得たる時に始めて享受し得ると思う。耳を傾けて数十人、数百人、数千数万人の誠を一度に聴き得たる時にこの崇高の感は始めて無上絶大の玄境げんきょうに入る。——余が將軍を見て流した涼しい涙はこの玄境の反応だろう。

將軍のあとに続いてオリ―ヴ色の新式の軍服を着けた士官が二三人通る。これは出迎と見えてその表情が將軍とはだいぶ違う。居きよは氣を移すと云う孟子もうしの語は小供の時分から聞いていたが戦争から帰った者と内地に暮らした人とはかほどに顔つきが違って見えるかと思つたと一層感慨が深い。どうかもう一遍將軍の顔が見たいものだと思つたが駄目だ。

ただ場外に群がる数万の市民が有らん限りの鬨を作つて停車場の硝子窓が破れるほどに響くのみである。余の左右前後の人々はようやくやくに列を乱して入口の方へなだれかかる。見たいのは余と同感と見える。余も黒い波に押されて一二間石段の方へ流れたが、それぎり先へは進めぬ。こんな時には余の性分としていつでも損をする。寄席がはねて木戸を出る時、待ち合せて電車に乗る時、人込みに切符を買う時、何でも多数競争の折には大抵最後に取り残される、この場合にも先例に洩れず首尾よく人後に落ちた。しかも普通の落ち方ではない。遙かこなたの人後だから心細い。葬式の赤飯に手を出し損つた時なら何とも思わないが、帝国の運命を決する活動力の断片を見損うのは残念である。どうかして見てやりたい。広場を包む万歳の声はこの時四方から大濤の岸に崩れるような勢で余の鼓膜に響き渡つた。もうたまらない。どうしても見なければならぬ。

ふと思いついた事がある。去年の春麻布のさる町を通行したら高い練堀のある広い屋敷の内では何か多人数打ち寄つて遊んででもいるのか面白そうに笑う声が聞えた。余はこの時どう云う腹工合かちよつとこの邸内を覗いて見たくなつた。全く腹工合のせいに相違ない。腹工合でなければ、そんな馬鹿氣た了見の起る訳がない。原因はとにかく、見たいものは見たいので原因のいかに困つて変化出沒する訳には行かぬ。しかし今云う通り高い

土塀の向う側で笑っているのだから壁に穴のあいておらぬ限りはどうてい思い通り志望を満足する事は何なんびと人の手際てぎわでも出来かねる。どうてい見る事が叶かなわないと四圍の状況から宣告を下されるとなお見てやりたくなる。愚ぐな話だが余は一目でも邸内を見なければ誓つてこの町を去らずと決心した。しかし案内も乞こわずに人の屋敷内に這入り込むのは盜賊の仕業しわざだ。と云つて案内を乞うて這入るのはなおいやだ。この邸内の者共の御世話にならず、しかもわが人格を傷きずつせず正々堂々と見なくては心持ちがわるい。そうするには高い山から見下みおろすか、風船の上から眺ながめるよりほかに名案もない。しかし双方共当座の間に合うような手輕なものとは云えぬ。よし、その儀ならこつちにも覺悟がある。高等学校時代で練習した高飛の術を応用して、飛び上がった時にちよつと見てやろう。これは妙策だ、幸い人通りもなし、あつたところが自分で自分が飛び上るに文句をつけられる因縁いんねんはない。やるべしと云うので、突然双脚に精一杯の力を込めて飛び上がった。すると熟練の結果は恐ろしい者で、かの土塀の上へ首が——首どころではない肩までが思うように出た。この機をはずすとどうてい目的は達せられぬと、ちらつく両眼を無理に据すえて、ここぞと思うあたりを瞥べっけん見すると女が四人でテニスをしていた。余が飛び上がるのを相図に四人が申し合せたようにホホホと癩かんの高い声で笑った。おやと思つうちにとたりと元のごとく地面の

上に立つた。

これは誰が聞いても滑稽である。冒険の主人公たる当人ですらあまり馬鹿気ているので今日まで何人にも話さなかつたくらい自ら滑稽と心得ている。しかし滑稽とか真面目めとか云うのは相手と場合によつて変化する事で、高飛びその物が滑稽とは理由のない言草である。女がテニスをしているところへこつちが飛び上がったから滑稽にもなるが、ロメオがジュリエットを見るために飛び上つたつて滑稽にはならない。ロメオくらいなところでは未だ滑稽を脱せぬと云うなら余はなお一步を進める。この凱旋の將軍、英名嚇々たる偉人を拝見するために飛び上がるのは滑稽ではあるまい。それでも滑稽か知らん？ 滑稽だつて構うものか。見たいものは、誰が何と云つても見たいのだ。飛び上がろう、それがいい、飛び上がるにしくなしだと、とうとうまた先例によつて一蹴を試むる事に決着した。先ず帽子をとつて小脇に抱い込む。この前は経験が足りなかつたので足が引力作用で地面へ引き着けられた勢に、買ったての中折帽が挨拶もなく宙返りをして、一間ばかり向へ転がった。それをから車を引いて通り掛つた車夫が拾つて笑いながらえへへと差し出した事を記憶している。こんどはその手は喰わぬ。これなら大丈夫と帽子を確と抑えながら爪先で敷石を弾く心持で暗に姿勢を整える。人後に落ちた仕合せには邪魔に

なるほど近くに人もおらぬ。しばし衰えた、歓声は盛り返す潮の岩に砕けたようにあたり一面に湧き上がる。ここだと思ひ切つて、両足が胴のなかに飛び込みはしまいかと疑うほど脚力をふるつて跳ね上つた。

幌を開いたランドウが横向に凱旋門を通り抜けようとする中に——いた——いた。例の黒い顔が湧き返る声に囲まれて過去の記念のごとく華やかなる群衆の中に点じ出されていた。將軍を迎えた儀仗兵の馬が万歳の声に驚ろいて前足を高くあげて人込の中にそれようとするのが見えた。將軍の馬車の上に紫の旗が一流れ颯となびくのが見えた。新橋へ曲る角の三階の宿屋の窓から藤鼠の着物をきた女が白いハンケチを振るのが見えた。見えたと思うより早く余が足はまた停車場の床の上に着いた。すべてが一瞬間の作用である。ぱつと射る稲妻の飽くまで明るく物を照らした後が常よりは暗く見えるように余は茫然として地に下りた。

將軍の去つたあとは群衆も自から乱れて今までのように静肅ではない。列を作つた同勢の一角が崩れると、堅い黒山が一度に動き出して濃い所がだんだん薄くなる。気早な連中はもう引き揚げると見える。ところへ將軍と共に汽車を下りた兵士が三々五々隊を組んで場内から出てくる。服地の色は褪めて、ゲートルの代りには黄な羅紗を畳んでぐるぐる

と脛へ巻きつけている。いずれもあらん限りの髻を生やして、出来るだけ色を黒くしている。これらも戦争の片破れである。大和魂を鑄固めた製作品である。実業家も入らぬ、新聞屋も入らぬ、芸妓も入らぬ、余のごとき書物と睨めくらをしているものは無論入らぬ。ただこの髻茫茫々として、むさくるしき事乞食を去る遠からざる紀念物のみはなくて叶わぬ。彼らは日本の精神を代表するのみならず、広く人類一般の精神を代表している。人類の精神は算盤で弾けず、三味線に乗らず、三頁にも書けず、百科全書中にも見当らぬ。ただこの兵士の色の黒い、みすぼらしいところに髻髻として揺曳している。出山ゆっせんの釈迦しゃかはコスメチックを塗つてはおらん。金の指輪も穿めておらん。芥溜ごみだめから拾い上げた雑巾ぞうきんをつぎ合せたようなもの一枚を羽織つているばかりじゃ。それすら全身を掩おほうには足らん。胸のあたりは北風の吹き抜けで、肋骨ろつこつの枚数は自由に読めるくらいだ。この釈迦しゃかが尊たつければこの兵士も尊たつといと云わねばならぬ。昔むか元寇げんこうの役えきに時宗ときむねが仏光ぶつこう国師こくしに謁えつした時、国師は何と云うた。威いを振ふるつて驀地ばくちに進めと吼ほえたのみである。このむさくろしき兵士らは仏光国師の熱喝ねつかつを喫きつした訳でもなからうが驀地に進むと云う禅機ぜんきにおいて時宗と古今ここんその揆きを一いつにしている。彼らは驀地に進み了して曠こうじよ如わがやと吾家に帰り来りたる英靈漢である。天上を行き天下てんげを行き、行き尽してやまざる底ていの気魄きはくが吾人の

尊敬あたいに価あたいせざる以上はっこうは八荒うちの中に尊敬すべきすべきものは微塵みじんほどもない。黒い顔！ 中には日本にに籍せきがあるのかと怪あやまれるくらい黒いのがいる。——刈り込まざる髻きぬ！ 棕櫚しゅろ箒ぼうきを砧きぬたで打うつたような髻きぬ——この気魄きはくは這裏しやりに磅ほうはくとして蟠わだかまり沆こうよう瀆たふとして漲みなぎっている。兵士へいしの一隊いちたいが出てくるたびに公衆こうしゆは万歳ばんざいを唱となえてやる。彼らかれらのあるものは例れいの黒い顔かほに笑えみを湛たたえて嬉うれし気げに通とほり過ぎる。あるものは傍目わきめもふらずのそのそと行く。歓迎かんげいとはいかなる者ものぞと不審ふしん気けに見える顔かほもたまには見える。またある者は自己じこの歡迎旗えんげいの下したに立たつて揚よう々と後おくれて出る同輩どうぱいを眺ながめている。あるいは石段いしだんを下くだるや否いなや迎むかへるものに擁ようせられて、あまりの不意ふい撃うちに挨拶あいさつさえも忘れて誰たれ彼の容赦ようしやなく握手くわしゆの礼れいを施せこしている。出征しゆしゆ中に満洲まんしゆで覚おぼえたのであろう。

その中に——これがはからずもこの話をかく動機どうきになつたのであるが——年の頃ころ二十八はちじゅうはち九くの軍曹ぐんそうが一人ひとりいた。顔かほは他の先生方せんせいと異ことなるところなく黒い、髻ひげも延のびるだけ延のびしておそらくは去年こぞから持ち越こしたものと思おもわれるが目鼻めびな立たちはほかの連中れんちゆうとは比較ひかくにならぬほど立派りつぱである。のみならず亡友しゆう浩こうさんと兄弟けいだいと見違まえるまでよく似にている。実はこの男おとこがただ一人ひとり石段いしだんを下くだりて出た時ははつと思おもつて馳かけ寄よろうとしたくらいであった。しかし浩こうさんは下士官げさくわんではない。志願兵しげんへいから出身しゆしんした歩兵中尉ふへいちゆうゐである。しかも故歩兵中尉こふへいちゆうゐで今いまで

は白山の御寺に一年余も厄介になつてゐる。だからいくら浩さんだと思いたくつても思えるはずがない。ただ人情は妙なものでこの軍曹が浩さんの代りに旅順で戦死して、浩さんがこの軍曹の代りに無事で還つて来たらさぞ結構であろう。御母さんも定めし喜ばれるであろうと、露見する氣づかないものだから勝手な事を考えながら眺めていた。軍曹も何か物足らぬと見えてしきりにあたりを見廻している。ほかのもののように足早に新橋の方へ立ち去る景色もない。何を探がしているのだろう、もしや東京のものでなくて様子が分らんのなら教えて遣りたいと思つてなお目を放さずに打ち守つてゐると、どこをどう潜り抜けたものやら、六十ばかりの婆さんが飛んで出て、いきなり軍曹の袖にぶら下がつた。軍曹は中肉ではあるが背は普通よりたしかに二寸は高い。これに反して婆さんは人並はずれて丈が低い上に年のせいで腰が少々曲つてゐるから、抱き着いたとも寄り添うたとも形容は出来ぬ。もし余が脳中にある和漢の字句を傾けて、その中からこのありさまを叙するに最も適當なる詞を探したなら必ずぶら下がるが当選するにきまつてゐる。この時軍曹は紛失物が見当つたと云う風で上から婆さんを見下す。婆さんはやつと迷兎を見つけたと云う体で下から軍曹を見上げる。やがて軍曹はあるき出す。婆さんもあるき出す。やはりぶらさがつたままである。近辺に立つ見物人は万歳万歳と兩人を囃したてる。婆さん

は万歳などには毫も耳を借す景色はない。ぶら下がったぎり軍曹の顔を下から見上げたまま吾が子に引き摺られて行く。冷飯草履と鋌を打った兵隊靴が入り乱れ、もつれ合つて、うねりくねつて新橋の方へ遠かつて行く。余は浩さんの事を思い出して悵然と草履と靴の影を見送つた。

二

浩さん！ 浩さんは去年の十一月旅順で戦死した。二十六日は風の強く吹く日であつたそうだ。遼東の大野を吹きめぐつて、黒い日を海に吹き落そうとする野分の中に、松樹山の突撃は予定のごとく行われた。時は午後一時である。掩護のために味方の打ち出した大砲が敵塁の左突角に中つて五丈ほどの砂煙りを捲き上げたのを相図に、散兵壕から飛び出した兵士の数は幾百か知らぬ。蟻の穴を蹴返したごとくに散り散りに乱れて前面の傾斜を攀じ登る。見渡す山腹は敵の敷いた鉄条網で足を容るる余地もない。ところを梯子を担い土嚢を背負つて区々に通り抜ける。工兵の切り開いた二間に足らぬ路は、先を争う者のために奪われて、後より詰めかくる人の勢に波を打つ。こちらから眺め

るとただ一筋の黒い河が山を裂いて流れるように見える。その黒い中に敵の弾丸は容赦なく落ちかかつて、すべてが消え失せたと思うくらい濃い煙が立ち揚る。怒る野分は横さまに煙りを千切つて遙かの空に攫つて行く。あとには依然として黒い者が簇然と蠢めいている。この蠢めいているもののうちに浩さんがいる。

火桶の中に浩さんと話をするときには浩さんは大きな男である。色の浅黒い髭の濃い立派な男である。浩さんが口を開いて興に乗つた話をするときは、相手の頭の中には浩さんのほか何もない。今日の事も忘れ明日の事も忘れ聴き惚れている自分の事も忘れて浩さんだけになってしまう。浩さんはかように偉大な男である。どこへ出しても浩さんなら大丈夫、人の目に着くにきまつていると思つていた。だから蠢めいているなどと云う下等な動詞は浩さんに対して用いたくない。ないが仕方がない。現に蠢めいている。鋏の先に掘り崩された蟻群の一匹のごとく蠢めいている。杓の水を喰つた蜘蛛の子のごとく蠢めいている。いかなる人間もこうなると駄目だ。大いなる山、大いなる空、千里を馳け抜ける野分、八方を包む煙り、鑄鉄の咽喉から吼えて飛ぶ丸——これらの前にはいかなる偉人も偉人として認められぬ。俵に詰めた大豆の一粒のごとく無意味に見える。嗚呼浩さん！ 一体どこで何をしているのだ？ 早く平生の浩さんになつて一番露助を驚かしたらよからう。

黒くむらがる者は丸たまを浴びるたびにぱつと消える。消えたかと思うと吹き散る煙の中に動いている。消えたり動いたりしているうちに、蛇へびの堀へいをわたるように頭から尾まで波を打つてしかも全体が全体としてだんだん上へ上へと登つて行く、もう敵塁だ。浩さん真先に乗り込まなければいけない。煙の絶間から見ると黒い頭の上に旗らしいものが靡なびいている。風の強いためか、押し返されるせいか、真直ぐに立ったと思うと寝る。落ちたのかと驚ろくとまた高くあがる。するとまた斜ななめに仆たおれかかる。浩さんだ、浩さんだ。浩さんに相違たにんずない。多人数集まつて揉もみに揉もんで騒いでいる中にもし一人でも人の目につくものがあれば浩さんに違ちがない。自分の妻は天下の美人である。この天下の美人が晴れの席へ出て隣りの奥様と撰えらぶところなくいつこう目立たぬのは不平な者だ。己おのれの子が己おのれの家庭にのさばっている間は天にも地にも懸かけ替かえのない若旦那である。この若旦那が制服を着けて学校へ出ると、向うの小間物屋のせがれと席ならを列べて、しかもその間に少しも懸隔けんかくのないように見えるのはちよつと物足らぬ感じがするだろう。余の浩さんにおけるもその通り。浩さんはどこへ出しても平生の浩さんらしくなければ気が済まん。播鉢すりばちの中に攪かき廻まわされる里芋さと芋のごとく紛然まぎ雑然とゴロゴロしては どうしても浩さんらしくない。だから、何でも構わん、旗を振ろうが、剣を翳かそうが、とにかくこの混乱のうちに少しなりとも人

の注意を惹くに足る働をするものを浩さんにしたい。したい段ではない。必ず浩さんにきまつている。どう間違つたつて浩さんが碌々として頭角をあらわさないなどと云う不見識な事は予期出来ないのである。——それだからあの旗持は浩さんだ。

黒い塊りが敵塁の下まで来たから、もう塁壁を攀じ上るだろうと思つうち、たちまち長い蛇の頭はぼつりと二三寸切れてなくなつた。これは不思議だ。丸を喰つて斃れたとも見えない。狙撃を避けるため地に寝たとも見えない。どうしたのだろう。すると頭の切れた蛇がまた二三寸ぶつりと消えてなくなつた。これは妙だと眺めてみると、順繰りに下から押し上る同勢が同じ所へ来るや否やたちまちなくなる。しかも砦の壁には誰一人としてとりついたものがない。塹壕だ。敵塁と我兵の間にはこの邪魔物があつて、この邪魔物を越さぬ間は一人も敵に近く事は出来ないのである。彼らはえいえいと鉄条網を切り開いた急坂を登りつめた揚句、この壕の端まで来て一も二もなくこの深い溝の中に飛び込んだのである。担つている梯子は壁に懸けるため、背負つている土嚢は壕を埋めるためと見えた。壕はどのくらい埋つたか分らないが、先の方から順々に飛び込んでなくなり、飛び込んでなくなつてとうとう浩さんの番に来た。いよいよ浩さんだ。すっかりしなくてはいけない。

高く差し上げた旗が横に靡なびいて寸断寸断に散るかと思うほど強く風を受けた後、旗竿が急に傾いて折れたなど疑う途端に浩さんの影はたちまち見えなくなった。いよいよ飛び込んだ！折から二竜山の方面より打ち出した大砲が五六発、大空に鳴る烈風を劈つんざいて一度に山腹に中あたつて山の根を吹き切るばかり轟とどろき渡る。迸ほとばしる砂煙は淋すなけむりさびしき初冬の日蔭を籠こめつくして、見渡す限りに有りとおある物を封おわじ了る。浩さんはどうなったか分らない。気が気でない。あの煙の吹いている底だと見当をつけて一心に見守る。夕立を遠くから望むように密に蔽おほい重なる濃き者は、烈はげしき風の捲まきかえ返してすくい去ろうと焦あせる中に依然として凝こり固こつて動かぬ。約二分間は眼をいくら擦こすつても盲目同然どうする事も出来ない。しかしこの煙りが晴れたら——もしこの煙りが散り尽したら、きつと見えるに違ちがない。浩さんの旗が壕の向むこう側がわに日を射返して耀かがやき渡わつて見えるに違ちがない。否向側を登りつくしてあの高く見えるひめがきの上に翻へんべん々と翻ひるがえつてに違ちがない。ほかの人ならとにかく浩さんだから、そのくらいの事は必ずあるにきまつている。早く煙が晴ればいい。なぜ晴れんדרらう。

占しめた。敵壘の右の端はしの突角の所が朧おぼろげ気に見え出した。中央の厚く築き上げた石壁も見え出した。しかし人影はない。はてな、もうあすこらに旗が動いているはずだが、ど

うしたのだろう。それでは壁の下の土手の中頃にいるに相違ない。煙は拭うがごとく一掃に上から下まで漸次に晴れ渡る。浩さんはどこにも見えない。これはいけない。田螺のように蠢めいていたほかの連中もどこにも出現せぬ様子だ。いよいよいけない。もう出るか知らん、五秒過ぎた。まだか知らん、十秒立った。五秒は十秒と変じ、十秒は二十、三十と重なっても誰一人の塹壕から向うへ這い上る者はない。ないはずである。塹壕に飛び込んだ者は向へ渡すために飛び込んだのではない。死ぬために飛び込んだのである。彼らの足が壕底に着くや否や穹窞より覬を定めて打ち出す機関砲は、杖を引いて竹垣の側面を走らす時の音がして瞬く間に彼らを射殺した。殺されたものが這い上がれるはずがない。石を置いた沢庵のごとく積み重なって、人の眼に触れぬ坑内に横わる者に、向へ上がれと望むのは、望むものの無理である。横わる者だつて上がりたいだろう、上りたければこそ飛び込んだのである。いくら上がりたくても、手足が利かなくては上がれぬ。眼が暗んでは上がれぬ。胴に穴が開いては上がれぬ。血が通わなくなつても、脳味噌が潰れても、肩が飛んでも身体が棒のように鯁張つても上がる事は出来ん。二竜山から打出した砲煙が散じ尽した時に上がれぬばかりではない。寒い日が旅順の海に落ちて、寒い霜が旅順の山に降つても上がる事は出来ん。ステッセルが開城して二十の砲砦がごと

ごとく日本の手に帰しても上る事は出来ん。白露の講和が成就して乃木將軍がめでた
 く凱旋しても上がる事は出来ん。百年三万六千日乾坤を提げて迎に來ても上がる事は
 ついにできぬ。これがこの塹壕に飛び込んだものの運命である。しかしてまた浩さんの運
 命である。蠢々として御玉杵子のごとく動いていたものは突然とこの底のない坑の
 うちに落ちて、浮世の表面から闇の裡に消えてしまった。旗を振ろうが振るまいが、人
 目につこうがつくまいがこうなつて見ると変りはない。浩さんがしきりに旗を振つたとこ
 ろはよかつたが、壕の底では、ほかの兵士と同じように冷たくなって死んでいたそうだ。
 ステツセルは降つた。講和は成立した。將軍は凱旋した。兵隊も歓迎された。しかし浩
 さんはまだ坑から上つて來ない。囚らず新橋へ行つて色の黒い將軍を見、色の黒い軍曹を
 見、背の低い軍曹の御母さんを見て涙まで流して愉快に感じた。同時に浩さんはなぜ壕か
 ら上がつて來んのだらうと思つた。浩さんにも御母さんがある。この軍曹のそのように
 背は低くない、また冷飯草履を穿いた事はあるまいが、もし浩さんが無事に戦地から帰
 つてきて御母さんが新橋へ出迎えに來られたとすれば、やはりあの婆さんのようにぐら下
 がるかも知れない。浩さんもプラットフォームの上で物足らぬ顔をして御母さんの群集の
 中から出てくるのを待つだらう。それを思うと可哀そうなのは坑を出て來ない浩さんより

も、浮世の風にあたつてゐる御母さんだ。塹壕に飛び込むまではとにかく、飛び込んでしまえばそれまでである。娑婆の天気は晴であろうとも曇であろうとも頓着はなからう。しかし取り残された御母さんはそうは行かぬ。そら雨が降る、垂れ籠めて浩さんの事を思い出す。そら晴れた、表へ出て浩さんの友達に逢う。歓迎で国旗を出す、あれが生きていたらと愚痴っぽくなる。洗湯で年頃の娘が湯を汲んでくれる、あんな嫁がいたらと昔を偲ぶ。これでは生きてゐるのが苦痛である。それも子福者であるなら一人なくなつても、あとに慰めてくれるものもある。しかし親一人子一人の家族が半分欠けたら、瓢箪の中から折れたと同じようなものでしめ括りがつかぬ。軍曹の婆さんではないが年寄りのぶら下がるものがない。御母さんは今に浩一が帰つて来たならばと、皺だらけの指を日夜に折り尽してぶら下がる日を待ち焦がれたのである。そのぶら下がる当人は旗を持つて思い切りよく塹壕の中へ飛び込んで、今に至るまで上がつて来ない。白髪は増したかも知れぬが將軍は歓呼の裡に帰来した。色は黒くなつても軍曹は得意にプラットフォームの上に飛び下りた。白髪になろうと日に焼けようと帰りさえすればぶら下がるに差し支えない。右の腕を繻帯で釣るして左の足が義足と変化しても帰りさえすれば構わん。構わんと云うのに浩さんは依然として坑から上がつて来ない。これでも上がつて来ないなら御

母さんの方からあとを追いかけて坑の中へ飛び込むより仕方がない。

幸い今日は閑だから浩さんのうちへ行つて、久し振りに御母さんを慰めてやろう？ 慰めに行くのはいいが、あすこへ行くと、行くたびに泣かれるので困る。せんだつてなどは一時間半ばかり泣き続けに泣かれて、しまいには大抵な挨拶はし尽して、大に應對に窮したくらいだ。その時御母さんはせめて氣立ての優しい嫁でもおりましたら、こんな時には力になりますのにとしきりに嫁々と繰り返して大に余を困らせた。それも一段落告げたらもう善かろうと御免蒙りかけると、あなたに是非見て頂くものがあると云うから、何ですと聴いたら浩一の日記ですと云う。なるほど亡友の日記は面白かろう。元来日記と云うものはその日その日の出来事を書き記すのみならず、また時々刻々の心ゆきを遠慮なく吐き出すものだから、いかに親友の手帳でも断りなしに目を通す訳には行かぬが、御母さんが承諾する——否先方から依頼する以上は無論興味のある仕事に相違ない。だから御母さんに読んでくれと云われたときは大に乘氣になつてそれは是非見せてちょうだいとまで云おうと思つたが、この上また日記で泣かれるような事があつては大変だ。とうてい余の手際では切り抜ける訳には行かぬ。ことに時刻を限つてある人と面会の約束をした刻限も逼つているから、これは追つて改めて上がつて緩々拝見を致す事に願ひましよう

逃げ出したくらいである。以上の理由で訪問はちと辟易へきえきの体ていである。もつとも日記は読みたくない事もない。泣かれるのも少しなら厭いやとは云わない。元々木や石で出来上ったと云う訳ではないから人の不幸に対して一滴の同情くらいは優ゆうに表し得る男であるがいかんせん性しようれい来らい余り口の製造に念が入いつておらんので応対に窮する。御母さんがまああなた聞いて下さいましと嘍すすり上げてくると、何と受けていいか分らない。それを無理矢理に体て裁さいを繕つくろつて半間はんまに調子を合せようとするとせつかくの慰藉いしや的好意が水泡と変化するのみならず、時には思いも寄らぬ結果を呈出して熱湯とまで沸騰ふつとうする事がある。これでは慰めに行つたのか怒らせに行つたのか先方でも了解に苦しむだろう。行きさえしなければ薬も盛らん代りに毒も進めぬ訳だから危険はない。訪問はいずれその内として、まず今日は見合せよう。

訪問は見合わせる事にしたが、昨日きのうの新橋事件を思い出すと、どうも浩さんの事が気に掛つてならない。何らかの手段で親友とむちを弔とむちつてやらねばならん。悼亡とうぼうの句などは出来る柄がらでない。文才があれば平生の交際をそのまま記述して雑誌にでも投書するがこの筆ではそれも駄目と。何かないかな？ うむあるある寺参りだ。浩さんは松樹山しょうじゆざんの塹壕ざんごうからまだ上あがつて来ないがその紀念の遺髪は遥はるかの海を渡つて駒込の寂光院じやくこういんに埋葬された。

ここへ行つて御参りをしてきようと西片町の吾家を出る。

冬の取つ付きである。小春と云えば名前を聞いてさえ熟柿のようないい心持になる。ことに今年はいつになく暖かなので袷羽織に綿入一枚の出で立ちさえ軽々とした快い感じを添える。先の斜めに減った杖を振り廻しながら寂光院と大師流に古い紺青で彫りつけた額を眺めて門を這入ると、精舎は格別なもので門内は蕭条として一塵の痕も留めぬほど掃除が行き届いている。これはうれしい。肌の細かな赤土が泥濘りもせず干乾びもせず、ねつとりとして日の色を含んだ景色ほどありがたいものはない。西片町は学者町か知らないが雅な家は無論の事、落ちついた土の色さえ見られないくらい近頃は住宅が多くなつた。学者がそれだけ殖えたのか、あるいは学者がそれだけ不風流なのか、まだ研究して見ないから分らないが、こうやって広々とした境内へ来ると、平生は学者町で満足を表していた眼にも何となく坊主の生活が羨しくなる。門の左右には周囲二尺ほどのな赤松が泰然として控えている。大方百年くらい前からかくのごとく控えているのだらう。鷹揚なところが頼母しい。神無月の松の落葉とか昔は称えたものだそうだが葉を振った景色は少しも見えない。ただ蟠つた根が奇麗な土の中から瘤だらけの骨を一二寸露わしているばかりだ。老僧か、小坊主か納所かあるいは門番が凝性で大方日に

三度くらい掃くのだらう。松を左右に見て半町ほど行くとつき当りが本堂で、その右が庫裏である。本堂の正面にも金泥の額が懸つて、鳥の糞か、紙を噛んで叩きつけたのか点々と筆者の神聖を汚がしている。八寸角の檨柱には、のたくつた草書の聯が読めるなら読んで見ると澄してかかつている。なるほど読めない。読めないとところをもつて見るとよほど名家の書いたものに違いない。ことによると王羲之かも知れない。えらそうで読めない字を見ると余は必ず王羲之にしたくなる。王羲之にしないと古い妙な感じが起らない。本堂を右手に左へ廻ると墓場である。墓場の入口には化銀杏がある。ただし化の字は余のつけたのではない。聞くとところによるとこの界限で寂光院のばけ銀杏と云えば誰も知らぬ者はないそうだ。しかし何が化けたつて、こんなに高くはなりそうもない。三抱もあろうと云う大木だ。例年なら今頃はとくに葉を振つて、から坊主になつて、野分のなかに唸っているのだが、今年は全く破格な時候なので、高い枝がごとごとく美しい葉をつけている。下から仰ぐと目に余る黄金の雲が、穏かな日光を浴びて、ところどころ鼈甲のように輝くからまぼしいくらい見事である。その雲の塊りが風もないのはらはらと落ちてくる。無論薄い葉の事だから落ちても音はしない、落ちる間もまたすこぶる長い。枝を離れて地に着くまでの間にあるいは日に向いあるいは日に背いて色々な光を放つ。色々な

変りはするものの急ぐ景色もなく、至つて豊かに、至つてしとやかに降つて来る。だから
 見ていると落つるのではない。空中を揺曳して遊んでいるように思われる。閑静である。
 —すべてのものの動かぬのが一番閑静だと思ふのは間違つてゐる。動かない大面積の中
 に一点が動くから一点以外の静さが理解できる。しかもその一点が動くと言ふ感じを過
 重ならしめぬくらい、否その一点の動く事それ自らが定寂の姿を帯びて、しかも他
 の部分の静粛なありさまを反思せしむるに足るほどに靡いたなら——その時が一番閑
 寂の感を与える者だ。銀杏の葉の一陣の風なきに散る風情は正にこれである。限りも
 ない葉が朝、夕を厭わず降つてくるのだから、木の下は、黒い地の見えぬほど扇形の小さ
 い葉で敷きつめられている。さすがの寺僧もここまでは手が届かぬと見えて、当座は掃除
 の煩を避けたものか、または堆かき落葉を興ある者と眺めて、打ち棄てて置くのか。とに
 かく美しい。

しばらく化銀杏の下に立つて、上を見たり下を見たり佇んでいたが、ようやくの事幹
 のもとを離れていよいよ墓地の中へ這入り込んだ。この寺は由緒のある寺だそうでここ
 ろどころに大きな蓮台の上に据えつけられた石塔が見える。右手の方に柵を控えたのに
 は梅花院殿、瘠鶴大居士とあるから大方大名か旗本の墓だろう。中には至極簡略で尺

たらずのもある。慈雲童子と楷書で彫つてある。小供だから小さい訳だ。このほか石塔も沢山ある、戒名も飽きるほど彫りつけてあるが、申し合わせたように古いのばかりである。近頃になつて人間が死なくなつた訳でもあるまい、やはり従前のごとく相応の亡者は、年々御客様となつて、あの剥げかかつた額の下を潜るに違ない。しかし彼らがひとたび化銀杏の下を通り越すや否や急に古る仏となつてしまう。何も銀杏のせいと云う訳でもなからうが、大方の檀家は寺僧の懇請で、余り広くない墓地の空所を狭めずに、先祖代々の墓の中に新仏を祭り込むからであらう。浩さんも祭り込まれた一人である。

浩さんの墓は古いと云う点においてこの古い卵塔婆内でだいぶ幅の利く方である。墓はいつ頃出来たものか確とは知らぬが、何でも浩さんの御父さんが這入り、御爺さんも這入り、そのまた御爺さんも這入つたとあるからけつして新らしい墓とは申されない。古い代りには形勝の地を占めている。隣り寺を境に一段高くなつた土手の上に三坪ほどな平地があつて石段を二つ踏んで行き当りの真中にあるのが、御爺さんも御父さんも浩さんも同居して眠つている河上家代々之墓である。極めて分りやすい。化銀杏を通り越して一筋道を北へ二十間歩けばよい。余は馴れた所だから例のごとく例の路をたどつて半分ほど来て、ふと何の気なしに眼をあげて自分の詣るべき墓の方を見た。

見ると！　もう来ている。誰だか分らないが後ろ向になつてしきりに合掌している様子だ。はてな。誰だろう。誰だか分りようはないが、遠くから見ても男でないだけは分る。恰好かっこうから云つてもたしかに女だ。女なら御母おつかさんか知らん。余は無頓着むとんじやくの性質で女の服装などはいっこう不案内だが、御母さんは大抵黒縷子くろじゆすの帯をしめている。ところがこの女の帯は——後から見ると最も人の注意を惹ひく、女の背中いっぱい広がっている帯は決して黒っぽいものでもない。光彩陸離こうさいりくりたるやたらに奇麗きれいなものだ。若い女だ！　と余は覚えず口の中で叫んだ。こうなると余は少々ばつがわるい。進むべきものか退しりぞくべきものかちよつと留つて考えて見た。女はそれとも知らないから、しゃがんだまま熱心に河上家代々の墓を礼拝している。どうも近寄りにくい。さればと云つて逃げるほど悪事を働いいた覚おぼえはない。どうしようと迷つてしていると女はすつくら立ち上がった。後ろは隣りの寺の孟も宗うそ敷やぶで寒いほど緑りの色が茂さかっている。その滴したたるばかり深い竹の前にすつくりと立つた。背景が北側の日影で、黒い中に女の顔が浮き出したように白く映る。眼の大きな頬ほ緊しまつた領えりの長い女である。右の手をぶらりと垂れて、指の先でハンケチの端はじをつかんでいゝる。そのハンケチの雪のように白いのが、暗い竹の中に鮮あざやかに見える。顔とハンケチの清く染め抜かれたほかは、あつと思つた瞬間に余の眼には何物も映らなかつた。

余がこの年としになるまでに見た女の数は夥おびただしいものである。往来の中、電車の上、公園の内、音楽会、劇場、縁日、随分見たと云つて宜よろしい。しかしこの時ほど驚おどろいた事はない。この時ほど美しいと思つた事はない。余は浩さんの事も忘れ、墓はかまい詣りに来た事も忘れ、きまりが悪わるいと云う事さえ忘れて白い顔と白いハンケチばかり眺ながめていた。今までは人が後ろにわいようとは夢にも知らなかつた女も、帰ろうとして歩き出す途端に、茫ぼうぜん然として佇たずんでいる余の姿が眼に入いつたものと見えて、石段の上へたにちよつと立ち留まつた。下から眺めた余の眼と上から見み下す女の視線が五間を隔へたてて互に行き当つた時、女はすぐ下を向いた。すると飽あくまで白い頬ほに裏から朱を溶といて流したような濃い色がむらむらと煮に染み出した。見るうちにそれが顔一面に広がって耳の付根まで真赤に見えた。これは氣の毒な事をした。化銀杏ばけいちようの方へ逆戻りをしよう。いやそうすればかえつて忍しのび足あしに後あとでもつけて来たように思われる。と云つて茫然と見とれてはなお失礼だ。死地に活を求むと云う兵法もあると云う話しだからこれは勢よく前進するにしくはない。墓場へ墓詣りをしに来たのだから別に不思議はあるまい。ただ躊躇ちゆうちよするから怪しまれるのだ。と決心して例のステッキを取り直して、つかつかと女の方にあるき出した。すると女も俯うつむ向いたまま歩を移して石段の下で逃げるように余の袖そでの傍そばを擦すりぬける。ヘリオトロープらしい

香かおりがふんとする。香が高いので、小春日に照りつけられたあわせばおり 拾羽織せなの背中からしみ込んだような気がした。女が通り過ぎたあとは、やっと安心して何だか我に帰った風に落ちついたので、元来何者だろうとまた振り向いて見る。すると運悪くまた眼と眼が行き合った。こんどは余は石段の上に立つてステッキを突いている。女は化銀杏ばけいちようの下で、行きかけた体を斜なめに振ねつてこつちを見上げている。銀杏は風なきになおひらひらと女の髪の上、袖の上、帯の上へ舞いさがる。時刻は一時か一時半頃である。ちょうど去年の冬浩さんが大風の中を旗を持って散兵壕から飛び出した時である。空は研とぎ上げた剣つるぎを懸かけつらねたごとく澄すんでいる。秋の空の冬に変わる間際まぎわほど高く見える事はない。羅うすものに似た雲の、微かすかに飛ぶ影も眸ひとみの裡には落ちぬ。羽根があつて飛び登ればどこまでも飛び登れるに相違ない。しかしどこまで昇つても昇り尽せはしまいと思われるのがこの空である。無限と云う感じはこんな空を望んだ時に最もよく起る。この無限に遠く、無限に遐はるかに、無限に静かな空を会え釈しゃくもなく裂いて、化銀杏が黄金こがねの雲を凝こらしている。その隣には寂光院の屋根瓦やねがわらが同じくこの蒼穹そうきゆうの一部を横かくに劃かくして、何十万枚重なつたものか黒々と鱗うろこのごとく、暖かき日影を射返している。——古き空、古き銀杏、古き伽藍がらんと古き墳墓かぶつが寂じやく寞まくとして存在する間に、美しい若い女が立っている。非常な対照である。竹藪うしを後うしろに背負しよつ

て立つた時はただ顔の白いのとハンケチの白いのばかり目に着いたが、今度はすらりと着こなした衣の色と、その衣を真中から輪に截った帯の色がいちじるしく目立つ。縞柄だの品物などは余のような無風流漢には残念ながら記述出来んが、色合だけはたしかに華やかな者だ。こんな物寂びた境内に一分たりともいるべき性質のものでない。いるとすればどこからか戸迷をして紛れ込んで来たに相違ない。三越陳列場の断片を切り抜いて落柿舎の物干竿へかけたようなものだ。対照の極とはこれであろう。——女は化銀杏の下から斜めに振り返つて余が詣る墓のありかを確かめて行きたいと云う風に見えたが、生憎余の方でも女に不審があるので石段の上から眺め返したから、思い切つて本堂の方へ曲つた。銀杏はひらひらと降つて、黒い地を隠す。

余は女の後姿を見送つて不思議な対照だと考えた。昔し住吉の祠で芸者を見た事がある。その時は時雨の中に立ち尽す島田姿が常よりは妍やかに余が瞳を照らした。箱根の大地獄で二八余りの西洋人に遇つた事がある。その折は十丈も煮え騰る湯煙りの凄じき光景が、しばらくは和らいで安慰の念を余が頭に与えた。すべての対照は大抵この二つの結果よりほかには何も生ぜぬ者である。在来の鋭どき感じを削つて鈍くするか、または新たに視界に現わるる物象を平時よりは明瞭に脳裏に印し去るか、これが普通吾人の予期する対

照である。ところが今^み睹た対象は毫もそんな感じを引き起さなかつた。相^{そう}除の対照でもなければ相^{そう}乗の対照でもない。古い、淋^{さび}しい、消極的な心の状態が減じた景色はさら
 にない、と云つてこの美しい綺羅^{きら}を飾つた女の容姿が、音楽会や、園遊会で逢^あうよりは
 一^ひと際目立つて見えたと言^いう訳でもない。余が寂^{じやく}光院の門を潜^{くぐ}つて得た情^{じやう}緒は、
 浮世を歩む年齢が逆行して父母未生以前^{ふもみしよう}に溯^{さか}つたと思^{おも}うくらい、古い、物寂^{ものさ}びた、憐れの
 多い、捕^{とら}えるほど確^{しか}とした痕^{こん}迹もなきまで、淡く消極的な情緒である。この情緒は藪^{やぶ}を
 後^{うし}ろにすつくりと立つた女の上に、余の眼が注^{そそ}がれた時に毫も矛盾の感を与えなかつたの
 みならず、落葉の中に振り返る姿を眺めた瞬間において、かえつて一層の深きを加えた。
 古伽藍^{ふるがらん}と剥^はげた額、化銀杏^{ばけいちやう}と動かぬ松、錯^{さく}落と列^{なら}ぶ石塔——死したる人の名を彫^{きざ}む
 死したる石塔と、花のような佳人とが融和して一団の氣と流れて円熟無礙^{むげ}の一種の感動を
 余の神経に伝えたのである。

こんな無理を聞かせられる読者は定めて承知すまい。これは文士の嘘^{きよげん}言だと笑う者さ
 えあろう。しかし事實はうそでも事實である。文士だろうが不文士だろうが書いた事は書
 いた通り懸^{かけ}価^ねのないところをかいいたのである。もし文士がわるければ断^{ことわ}つて置く。余は文
 士ではない、西片町^{にししかたまち}に住む学者だ。もし疑うならこの問題をとつて学者的に説明してや

ろう。読者は沙翁さおうの悲劇マクベスを知っているだろう。マクベス夫婦が共謀して主君のダ
ンカンを寝室の中で殺す。殺してしまうや否いなや門の戸を続けさま様にたたまくものがある。すると
門番が敲くは敲くはと云いながら出て来て酔漢の管くだを捲まくようなたわいもない事を呂律ろれつの
廻らぬ調子で述べ立てる。これが対照だ。対照も対照も一通りの対照ではない。人殺しの
傍わきで都々逸とどどいつを歌うくらいの対照だ。ところが妙な事はこの滑稽こっけいを挿は込んだために今までの
凄せい愴そうたる光景が多少和やわらげられて、ここに至って一段とくつるぎがついた感じもなけれ
ば、また滑稽が事件の排列の具合から平生より一倍のおかしみを与えると云う訳でもない。
それでは何らの効果こうかもないかと云うと大変ある。劇全体を通じての物凄ものすごさ、怖おそろしさはこ
の一段の諧かいぎ謔ぎやくのために白熱度に引き上げらるのである。なお拡大して云えばこの場
合においては諧謔その物が畏怖いふである。恐懼きょうくである、悚しやうぜん然ぜんとして粟あわを肌はだえに吹く要素
になる。その訳を云えば先まずこうだ。

吾人が事物に対する観察点が従来の経験で支配せらるるのは言げんを待たずして明瞭な事実
である。経験の勢力は度数と、単独な場合に受けた感動の量に因よって高下増減するのも争
われぬ事実であろう。絹布きぬふとん団だんに生れ落ちて御意ぎよいだ仰せだと持ち上げられる経験がたび重かさ
なると人間は余に頭を下げるために生れたのじやなと御意ぎよい遊あそばすようになる。金で酒を買

い、金で妾めかけを買い、金で邸宅、朋友ほうゆう、從五位しゅごいまで買った連れん中じゅうは金さえあれば何でも出来るさと金庫を横目に睨にらんで高たかを括くくつた鼻先を虚空こくう遙はるかに反そり返かえす。一度の経験でも御多分ごたぶんには洩もれん。箔屋町はくやちやうの大火事に身代しんだいを潰つぶした旦那は板橋の一つ半でも蒼あおくなるかも知れない。濃尾のうびの震災に瓦の中から掘り出された生き仏はドンが鳴っても念仏ねんぶつを唱となえるだろう。正直な者が生しょう涯がいに一返べん万引を働うたいても疑うたがいを掛ける知人もないし、冗談じやうだんを商売にする男が十年に半日真面目まじめな事件を担かぎ込んでも誰も相手にするものはない。つまりるところ吾々の観察点と云うものは従来の情性で解決せられるのである。吾々の生活は千差万別であるから、吾々の情性も商売により職業により、年齢により、氣質により、両性によりおのおのて各異なるであらう。がその通り。劇を見るときにも小説を読むときにも全篇を通じて調子があつて、この調子が読者、観客の心に反応するとやはり一種の情性になる。もしこの情性を構成する分子が猛烈であればあるほど、情性その物も牢ろうとして動かすべからず抜くべからざる傾向を生ずるにきまつている。マクベスは妖婆ようば、毒婦、兇きよう漢かんの行為動作を刻意こくいに描写した悲劇である。読んで冒頭より門番の滑稽こっけいに至つて冥々めいめいの際読者の心に生ずる唯一の情性は怖と云う一字に帰着してしまふ。過去がすでに怖ふである、未来もまた怖なるべしとの予期は、自然おのと己おのれを放射して次に出現すべきいかなる出来事を

もこの怖に関連して解釈しようと試みるのは当然の事と云わねばならぬ。船に酔つたものが陸に上つた後までも大地を動くものと思ひ、臆病に生れついた雀が案山子を例の爺さんかと疑うごとく、マクベスを読む者もまた怖の一字をどこまでも引張つて、怖を冠すべからざる辺にまで持つて行こうと力むるは怪しむに足らぬ。何事をも怖化せんとあせる矢先に現わるる門番の狂言は、普通の狂言諧と受け取れまい。

世間には諷語と云うがある。諷語は皆表裏二面の意義を有している。先生を馬鹿の別号に用ひ、大将を匹夫の渾名に使うのは誰も心得ていよう。この筆法で行くと人に謙遜するのはますます人を愚にした待遇法で、他を称揚するのは熾に他を罵倒した事になる。表面の意味が強ければ強いほど、裏側の含蓄もようやく深くなる。御辞儀一つで人を愚にするよりは、履物を揃えて人を揶揄する方が深刻ではないか。この心理を一步開拓して考へて見る。吾々が使用する大抵の命題は反対の意味に解釈が出来る事とならう。さあどつちの意味にしたものだらうと云うときに例の惰性が出て苦もなく判断してくれる。滑稽の解釈においてもその通りと思う。滑稽の裏には真面目がくつついてゐる。大笑の奥には熱涙が潜んでゐる。雑談の底には啾々たる鬼哭が聞える。とすれば怖と云う惰性を養成した眼をもつて門番の諧謔を読む者は、その諧謔を正面から解釈したものであ

ろうか、裏側から観察したものであろうか。裏面から観察するとすれば醉漢の妄語のうち
 に身の毛もよだつほどの畏懼の念はあるはずだ。元来諷語は正語よりも皮肉なるだけ正語
 よりも深刻で猛烈なものである。虫さえ厭う美人の根性を透見して、毒蛇の化身す
 なわちこれ天女なりと判断し得たる刹那に、その罪悪は同程度の他の罪悪よりも一層怖
 るべき感じを引き起す。全く人間の諷語であるからだ。白昼の化物の方が定石の幽
 霊よりも或る場合には恐ろしい。諷語であるからだ。廃寺に一夜をあかした時、庭前の一
 本杉の下でカツポレを躍るものがあつたらこのカツポレは非常に物凄かろう。これも一
 種の諷語であるからだ。マクベスの門番は山寺のカツポレと全然同格である。マクベスの
 門番が解けたら寂光院の美人も解けるはずだ。

百花の王をもつて許す牡丹さえ崩れるときは、富貴の色もただ好事家の憐れをかうに足
 らぬほど脆いものだ。美人薄命と云う諺もあるくらいだからこの女の寿命も容易に保険は
 つけられない。しかし妙齡の娘は概して活気に充ちている。前途の希望に照らされて、見
 るからに陽気な心持のするものだ。のみならず友染とか、繻珍とか、ぱつとした色気
 のものに包まっているから、横から見ても縦から見ても派出である立派である、春景色
 である。その一人が——最も美しくしきその一人が寂光院の墓場の中に立った。浮かかない、

古臭い、沈静な四顧の景物の中に立った。するとその愛らしき眼、そのはなやかな袖が忽そでこ然つぜんと本来の面目を変じて蕭しょうじょう条たる周囲に流れ込んで、境内けいだいじやくまく寂寞じやくまくの感を一層深こくらしめた。天下に墓ほど落つたものはない。しかしこの女が墓の前に延び上がった時は墓よりも落ちついていた。銀杏いちょうの黄葉こうようは淋さみしい。まして化ばけるとあるからな淋さみしい。しかしこの女が化銀杏ばけいちょうの下に横顔を向けて佇たたずんだときは、銀杏の精が幹から抜け出したと思われくらい淋しかった。上野の音楽会でなければ釣り合わぬ服装をして、帝国ホテルの夜会にでも招待されそうなの女が、なぜかくのごとく四辺の光景と映えいたい帯たいして索さくば寞くの観を添えるのか。これも諷語ふうごだからだ。マクベスの門番かどが怖おそろしければ寂光院じくくわんのこの女も淋しくなくてはならん。

御墓を見ると花筒に菊がさしてある。垣根に咲く豆菊の色は白いものばかりである。これも今の女のせいに相違ちがひない。家うちから折つて来たものか、途中で買つて来たものか分らん。もしや名刺でも括くくりつけてはないかと葉裏まで覗のぞいて見たが何も無い。全体何物だろう。余は高等学校時代から浩さんとは親しい付き合ひの一人であつた。うちへはよく泊りに行つて浩さんの親類は大抵知つている。しかし指を折つてあれこれと順々に勘定して見ても、こんな女は思い出せない。すると他人か知らん。浩さんは人好きのする性質で、交際もだ

いぶ広かったが、女に朋友がある事はついに聞いた事がない。もつとも交際をしたからと云つて、必らず余に告げるとは限つておらん。が浩さんはそんな事を隠すような性質ではないし、よしほかの人に隠したからと云つて余に隠す事はないはずだ。こう云うとおかしいが余は河上家の内情は相続人たる浩さんに劣らんくらい精しく知っている。そうしてそれは皆浩さんが余に話したのである。だから女との交際だつて、もし実際あつたとすればとくに余に告げるに相違ない。告げぬところをもつて見ると知らぬ女だ。しかし知らぬ女が花まで提げて浩さんの墓参りにくる訳がない。これは怪しい。少し変だが追懸けて名前だけでも聞いて見ようか、それも妙だ。いつその事黙つて後を付けて行く先を見届けようか、それではまるで探偵だ。そんな下等な事はしたくない。どうしたら善かろうと墓の前で考えた。浩さんは去年の十一月塹壕に飛び込んだぎり、今日まで上がつて来ない。河上家代々の墓を杖で敲いても、手で揺り動かしても浩さんはやはり塹壕の底に寝ているだろう。こんな美人が、こんな美しい花を提げて御詣りに来るのも知らずに寝ているだろう。だから浩さんはあの女の素性も名前も聞く必要もあるまい。浩さんが聞く必要もないものを余が探究する必要はなおさらない。いやこれはいかぬ。こう云う論理ではあの女の身元を調べてはならんと云う事になる。しかしそれは間違っている。なぜ？ なぜは追つて

考えてから説明するとして、ただ今の場合は非共聞きたきなくはならん。何でも蚊かでも聞かないと気が済まん。いきなり石段を一段ひとまたに飛び下りて化銀杏ばけいちようの落葉を蹴散けちらして寂光院の門を出て先まず左の方を見た。いない。右を向いた。右にも見えない。足早に四つ角まで来て目の届く限り東西南北を見渡した。やはり見えない。とうとう取り逃がした。仕方がない、御母おつかさんに逢つて話をして見みよう、ことによつたら容子ようすが分るかも知れない。

三

六畳の座敷は南みなみむき向で、拭き込んだ椽えんがわ側の端はじに神代杉じんだいすぎの手拭懸てぬぐいかけが置いてある。
軒のきした下から丸い手水桶ちようずおけを鉄の鎖くさりで釣つりしたのは洒落しやれているが、その下ひとむらに一叢ひとむらの木賊とくさをあしらつた所が一段の趣おもむきを添える。四つ目垣の向うは二三十坪の茶ちや畠はたけでその間に梅の木が三四本見える。垣に結ゆうた竹の先に洗濯した白足袋しろたびが裏返しに乾ほしてあつてその隣りには如露じよろが逆さかさまに被かぶせてある。その根元に豆菊かたが塊かたまつて咲いて累々るいりと白玉はくぎよくを綴つづつているのを見て「奇麗きれいですな」と御母おつかさんに話しかけた。

「今年あつは暖あつたかだもんですからよく持ちます。あれもあなた、浩一こういちの大好きな菊で……」

「へえ、白いのが好きでしたかな」

「白い、小さい豆のようなのが一番面白いと申して自分で根を貰って来て、わざわざ植えたので御座います」

「なるほどそんな事がありましたな」と云ったが、内心は少々気味が悪かった。 寂光
院の花筒に挿んであるのは正にこの種のこの色の菊である。

「御叔母さん近頃は御寺参りをなさいますか」

「いえ、せんだつて中から風邪の気味で五六日伏せつておりましたものですから、ついつい仏へ無沙汰を致しまして。——うちにおつても忘れる間は無いのですけれども——年をとりますと、御湯に行くのも退儀になりましてね」

「時々は少し表をあるく方が薬ですよ。近頃はいい時候ですから……」

「御親切にありがとうございます。親戚のものなども心配して色々云つてくれますが、どうもあなた何分元気がないものですから、それにこんな婆さんを態々連れてあるいてくれるものありません」

こうなると余はいつでも言句に窮する。どう云つて切り抜けていいか見当がつかない。仕方がないから「はああ」と長く引つ張つたが、御母さんは少々不平の気味である。さあ

しまったと思つたが別に片附けようもないから、梅の木をあちらこちら飛び歩るいている
四十雀を眺めていた。御母さんも話の腰を折られて無言である。

「御親類の若い御嬢さんでもあると、こんな時には御相手にいいですがね」と云いながら
不調法なる余にしては天晴な出来だと自分で感心して見せた。

「生憎そんな娘もおりませず。それに人の子にはやはり遠慮勝ちで……せがれに嫁でも
貰つて置いたら、こんな時にはさぞ心丈夫だろうと思ひます。ほんに残念な事をしました」

そら娶が出た。くるたびによめが出ない事はない。年頃の息子に嫁を持たせたいと云う
のは親の情としてきもあるべき事だが、死んだ子に娶を迎えて置かなかつたのをも残念が
るのは少々平仄が合わない。人情はこんなものか知らん。まだ年寄になつて見ないか
ら分らないがどうも一般の常識から云うと少し間違つてゐるようだ。それは一人で侘しく
暮らすより氣に入つた嫁の世話になる方が誰だつて頼りが多からう。しかし嫁の身になつ
ても見るがいい。結婚して半年も立たないうちに夫は出征する。ようやく戦争が濟んだ
と思うと、いつの間にか戦死している。二十を越すか越さないのに、姑と二人暮しで一生
を終る。こんな残酷な事があるものか。御母さんの云うところは老人の立場から云えば無
理もない訴だが、しかし随分我儘な願だ。年寄はこれだからいかぬと、内心はすこぶる

不平であったが、滅多な抗議を申し込むとまた気色を悪くさせる危険がある。せつかく慰めに來ていつも失策をやるのは余り器量のない話だ。まあまあだまっているに若くはなしと覚悟をきめて、反つて反対の方角へと楯をとった。余は正直に生れた男である。しかし社会に存在して怨まれずに世の中を渡ろうとすると、どうも嘘がつきたくなくなる。正直と社会生活が両立するに至れば嘘は直ちにやめるつもりでいる。

「實際残念な事をしましたね。全体浩さんはなぜ嫁をもらわなかったんですか」

「いえ、あなた色々探しておりますうちに、旅順へ参るようになったもので御座んすから」
「それじゃ当人も貰うつもりでいたんでしょ」

「それは……」と云つたが、それぎり黙っている。少々様子が変だ。あるいは寂光院事件の手懸りが潜伏していそうだ。白状して云うと、余はその時浩さんの事も、御母さんの事も考えていかなかった。ただあの不思議な女の素性と浩さんとの関係が知りたいので頭の中はいつぱいになつている。この日における余は平生のような同情的動物ではない。全く冷静な好奇心とも称すべき代物に化していた。人間もその日その日で色々になる。悪人になつた翌日は善男に変じ、小人の昼の後に君子の夜がくる。あの男の性格はなどと手にとつたように吹聴する先生があるがあれは利口の馬鹿と云うものでその日その日の

自己を研究する能力さえないから、こんな傍若無人の囁語を吐いて独りで恐悦がるのである。探偵ほど劣等な家業はまたとあるまいと自分にも思い、人にも宣言して憚らなかつた自分が、純然たる探偵的態度をもつて事物に対するに至つたのは、すこぶるあきれ返つた現象である。ちよつと言ひ淀んだ御母さんは、思い切つた口調で

「その事について浩一は何かあなたに御話をした事は御座いませんか」

「嫁の事ですか」

「ええ、誰か自分の好いたものがあるような事を」

「いいえ」と答えたが、実はこの問こそ、こつちから御母さんに向つて聞いて見なければならん問題であつた。

「御叔母さんには何か話しましたらう」

「いいえ」

望の綱はこれぎり切れた。仕方がないからまた眼を庭の方へ転ずると、四十雀はずでどこかへ飛び去つて、例の白菊の色が、水気を含んだ黒土に映じて見事に見える。その時ふと思ひ出したのは先日日記の事である。御母さんも知らず、余も知らぬ、あの女の事があるいは書いてあるかも知れぬ。よしあからさまに記してなくても一応目を通したら

何か手懸りてがかがあるう。御母さんは女の事だから理解出来んかも知れんが、余が見ればこうだろうくらいの見当はつくわけだ。これは催さい促そくして日記を見るに若くしはない。

「あの先日御話しの日記ですね。あの中に何かかいてはありませんか」

「ええ、あれを見ないうちは何とも思わなかったのですが、つい見たものですから……」
と御母さんは急に涙声になる。また泣かした。これだから困る。困りはしたものの、何か書いてある事はたしかだ。こうなつては泣こうが泣くまいがそんな事は構つておられん。

「日記に何か書いてありますか？ それは是非拝見しましょう」と勢よく云つたのは今から考えて赤面の次第である。御母さんは起たつて奥へ這入はいる。

やがて襖ふすまをあけてポケット入れの手帳を持つて出てくる。表紙は茶の革かわでちよつと見ると紙入のような体裁である。朝夕内うちがくしに入れたものと見えて茶色の所が黒ずんで、手垢てあかでびかびか光っている。無言のまま日記を受取つて中を見みようとすると表の戸がからからと開あいて、頼みますと云う声がする。生憎あいにく来客だ。御母さんは手真似てまねで早く隠せと云うから、余は手帳を内懐うちぶとこに入れて「宅へ帰つてもいいですか」と聞いた。御母さんは玄関の方を見ながら「どうぞ」と答える。やがて下女が何とかさまが入いらっしゃいましたと注進にくる。何とかさまに用はない。日記さえあれば大丈夫早く帰つて読まなくつて

はならない。それではと挨拶をして久堅町の往来へ出る。

伝通院の裏を抜けて表町の坂を下りながら路々考えた。どうしても小説だ。ただ小説に近いだけ何だか不自然である。しかしこれから事件の真相を究めて、全体の成行が明瞭になりさえすればこの不自然も自ずと消滅する訳だ。とにかく面白い。是非探索——探索と云うと何だか不愉快だ——探究として置こう。是非探究して見なければならぬ。それにしても昨日あの女のあとを付けなかつたのは残念だ。もし向後あの女に逢う事が出来ないとするとこの事件は判然と分りそうにもない。入らぬ遠慮をして流星光底じやないが逃がしたのは惜しい事だ。元来品位を重んじ過ぎたり、あまり高尚にすると、得てこんな事になるものだ。人間はどこかに泥棒的分子がないと成功はしない。紳士も結構には相違ないが、紳士の体面を傷けざる範囲内において泥棒根性を発揮せんとせつかくの紳士が紳士として通用しなくなる。泥棒気のない純粹の紳士は大抵行き倒れになるそうだ。よしこれからはもう少し下品になつてやろう。とくだらぬ事を考えながら柳町の橋の上まで来ると、水道橋の方から一輛の人力車が勇ましく白山の方へ馳け抜ける。車が自分の前を通り過ぎる時間は何秒と云うわずかの間であるから、余が冥想の眼をふとあげて車の上を見た時は、乗っている客はすでに眼界から消えかかっていた。がその人の顔は？

ああ寂光院だと気が着いた頃はもう五六間先へ行っている。ここだ下品になるのはここだ。何でも構わんから追い懸けると、下駄の齒をそちらに向けたが、徒歩で車のあとを追い懸けるのは余り下品すぎる。氣狂きちがいでなくつてはそんな馬鹿な事をするものはない。車、車、車はおらんかなと四方を見廻したが生憎あいにく一輛もおらん。そのうちに寂光院は姿も見えないくらい遥はるかあなたに馳け抜ける。もう駄目だ。氣狂と思われるまで下品にならなければ世の中は成功せんものかなと惘然ぼうぜんとして西片町へ歸つて来た。

とりあえず、書齋に立て籠こもつて懐中から例の手帳を出したが、何分夕景ゆうけいではつきりせん。実は途上でもあちこちと拾い読みに読んで来たのだが、鉛筆でなぐりがきに書いたものだから明るい所でも容易に分らない。ランプを点つける。下女が御飯はと云つて来たから、めしは後あとで食うと追い返す。さて一頁ページから順々に見て行くと皆陣中の出来事のみである。しかも控こうそく僣ぬすの際ふんじんに分陰ぶんいんを偷ぬすんで記しつけたものと見えて大概の事は一句二句で弁じている。「風、坑道内にて食事。握り飯二個。泥まぶれ」と云うのがある。「夜来風邪ふしよの氣味、発熱。診察を受けず、例のごとく勤務」と云うのがある。「テント外の歩哨ほしやう散弾に中あたる。テントに仆たおれかかる。血痕けつこんを印す」「五時大突撃。中隊全滅、不成功に終る。残念※」残念の下に！が三本引いてある。無論記憶を助けるための手控てびかえであるから、毫ごうも

文章らしいところはない。字句を修飾したり、彫琢ちやうたくしたりした痕跡は薬にしたくも見当らぬ。しかしそれが非常に面白い。ただありのままをありのままに写しているところが、大おおに気に入った。ことに俗人の使用する壮士の口吻がないのが嬉しい。怒気天を衝つくだの、暴慢なる露人だの、醜しゆうりよ虜たんの胆たんを寒からしむだの、すべてえらそうで安っぽい辞句はどこにも使っていない。文体はなはだ気に入った、さすがに浩さんだと感心したが、肝心かんじんの寂光院事件はまだ出て来ない。だんだん読んで行くうちに四行ばかり書いて上から棒を引いて消した所が出て来た。こんな所が怪しいものだ。これを読みこなさなければ気が済まん。手帳をランプのホヤに押しつけて透すかして見る。二行目の棒の下からある字が三分の二ばかり食はみ出している。郵の字らしい。それから骨を折ってようよう郵便局の三字だけ片づけた。郵便局の上の字は大※だけ見えている。これは何だろうと三分ほどランプと相談をしてやつと分った。本郷郵便局である。ここまではようやく漕こぎつけたがそのほかは裏から見ても逆さかさまに見てもどうしても読めない。とうとう断念する。それから二三頁進むと突然一大発見に遭遇した。「二三日にさんち一睡もせんで勤務中坑内仮寝かしん。郵便局で逢った女の夢を見る」

余は覚えずどきりとした。「ただ二三分の間、顔を見たばかりの女を、ほど経へて夢に見

るのは不思議である」この句から急に言文一致になっている。「よほど衰弱している証拠であろう、しかし衰弱せんでもあの女の夢なら見るかも知れん。旅順へ来てからこれで三度見た」

余は日記をびしやりと敲たたいてこれだ！ と叫んだ。御母おつかさんが嫁々と口癖のように云うのは無理はない。これを読んでいいるからだ。それを知らずに我わがまま儘だの残酷だのと心中で評したのは、こつちが悪わるいのだ。なるほどこんな女がいるなら、親の身として一日でも添そわしてやりたいだろう。御母さんが嫁がいたらいたらと云うのを今まで誤解して全く自分の淋しいのをまぎらすためとばかり解釈していたのは余の眼識の足らなかつたところだ。あれは自分の我儘で云う言葉ではない。可愛い息子を戦死する前に、半月でも思い通りにさせてやりたかつたと云う謎なぞなのだ。なるほど男は呑気のんきなものだ。しかし知らん事なら仕方がない。それは先まずよしとして元来寂光院じやくこういんがこの女なのか、あるいはあれは全く別物で、浩さんの郵便局で逢つたと云うのはほかの女なのか、これが疑問である。この疑問はまだ断定出来ない。これだけの材料でそう早く結論に高飛びはやりかねる。やりかねるが少しは想像を容ゆるれる余地もなくては、すべての判断はやれるものではない。浩さんが郵便局であの女に逢つたとする。郵便局へ遊びに行く訳はないから、切手を買うか、為替かわせを

出すか取るかしたに相違ない。浩さんが切手を手紙へ貼る時に傍にいたあの女が、どう云う拍子かで差出人の宿所姓名を見ないとは限らない。あの女が浩さんの宿所姓名をその時に覚え込んだとして、これに小説的分子を五分ばかり加味すれば寂光院事件は全く起らんと云えぬ。女の方はそれで解せたとして浩さんの方が不思議だ。どうしてちよつと逢ったものをそう何度も夢に見るかしらん。どうも今少ししたしかな土台が欲しいがとなお読んで行くと、こんな事が書いてある。「近世の軍略において、攻城は至難なるものの一として数えらる。我が攻囲軍の死傷多きは怪しむに足らず。この二三ヶ月間に余が知れる将校の城下に斃れたる者は枚挙に遑あらず。死は早晚余を襲い来らん。余は日夜に両軍の砲撃を聞きて、今か今かと順番の至るを待つ」なるほど死を決していたものと見える。十一月二十五日の条にはこうある。「余の運命もいよいよ明日に逼った」今度は言文一致である。「軍人が軍さで死ぬのは当然の事である。死ぬのは名誉である。ある点から云えば生きて本国に帰るのは死ぬべきところを死に損なつたようなものだ」戦死の当日の所を見ると「今日限りの命だ。二童山を崩す大砲の声がしきりに響く。死んだらあの音も聞えぬだろう。耳は聞えなくなつても、誰か来て墓参りをしてくれるだろう。そうして白い小さい菊でもあげてくれるだろう。寂光院は閑静な所だ」とある。その次に「強い風だ。いよ

いよこれから死にに行く。丸たまに中あたつて仆たおれるまで旗を振って進むつもりだ。御母おつかさんは、寒いだろう」日記はここで、ぶつりと切れている。切れているはずだ。

余はぞつとして日記を閉じたが、いよいよあの女の事が気に懸かかつてたまらない。あの車は白山の方へ向いて馳かけて行つたから、何でも白山方面のものに相違ない。白山方面とすれば本郷の郵便局へ来んとも限らん。しかし白山だつて広い。名前も分らんものを探たずねて歩いたつて、そう急に知れる訳がない。とにかく今夜の間に合うような簡略な問題ではない。仕方がないから晩ばんめし食を済ましてその晩はそれぎり寝る事にした。実は書物を読んで何を書いてあるか茫ぼうぼう々として海に對するような感があるから、やむをえず床へ這はいつたのだが、さて夜具の中でも思う通りにはならんもので、終夜安眠が出来なかつた。

翌日学校へ出て平常の通り講義はしたが、例の事件が気になつていつものように授業に身いが入らない。控所へ来ても他の職員と話しをする気にならん。学校の退ひけるのを待ちかねて、その足で寂光院へ来て見たが、女の姿は見えない。昨日きのうの菊が鮮やかに竹藪たけやぶの緑に映じて雪の団子だんごのように見えるばかりだ。それから白山から原町、林町の辺へんをぐるぐる廻つて歩いたがやはり何らの手懸てがりもない。その晩は疲労のため寝る事だけはよく寝た。しかし朝になつて授業が面白く出来ないのは昨日と変る事はなかつた。三日目に教員の一

人を捕まえて君白山方面に美人がいるかなと尋ねて見たら、うむ沢山いる、あっちへ引越したまえと云った。帰りがけに学生の一人に追いついて君は白山の方にいるかと聞いたたら、いいえ森川町ですと答えた。こんな馬鹿な騒ぎ方をしていたって始まる訳のものではない。やはり平生のごとく落ちついて、緩るりと探究するに若くなしと決心を定めた。それでその晩は煩悶焦慮もせず、例の通り静かに書齋に入つて、せんだつて中からの取調物を引き続きやる事にした。

近頃余の調べている事項は遺伝と云う大問題である。元来余は医者でもない、生物学者でもない。だから遺伝と云う問題に関して専門上の智識は無論有しておらぬ。有しておらぬところが余の好奇心を挑撥する訳で、近頃ふとした事からこの問題に関してその起原発達の歴史やら最近の学説やらを一通り承知したいと云う希望を起して、それからこの研究を始めたのである。遺伝と一口に云うとすこぶる単純なようであるがだんだん調べて見ると複雑な問題で、これだけ研究していても充分生涯の仕事はある。メンデルズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘツケルの議論だの、その弟子のヘルトウィツヒの研究だの、スペンサーの進化心理説だのと色々の人が色々の事を云うている。そこで今夜は例のごとく書齋の裡で近頃出版になつた英吉利のリードと云う人の著述を読むつもりで、二三

枚だけは何気なくはぐってしまった。するとどう云う拍子か、かの日記の中の事柄が、書物を読ませまいと頭の中へ割り込んでくる。そうはさせぬとまた一枚ほど開けると、今度は寂光院が襲つて来る。ようやくそれを追払つて五六枚無難に通過したかと思うと、御母さんの切り下げの被布姿がページの上面にあらわれる。読むつもりで決心して懸つた仕事だから読めん事はない。読めん事はないがページとページの間に狂言が這入る。それでも構わずどしどし進んで行くと、この狂言と本文の間が次第次第に接近して来る。しまいはどこからが狂言でどこまでが本文か分らないようにぼうつとして来た。この夢のようなありさまで五六分続けたと思ううち、たちまち頭の中に電流を通じた感じがしてはつと我に歸つた。「そうだ、この問題は遺伝で解ける問題だ。遺伝で解けばきつと解ける」とは同時に吾口を突いて飛び出した言語である。今まではただ不思議である小説的である。何となく落ちつかない、何か疑惑を晴らす工夫はあるまいか、それには当人を捕えて聞き糺すよりほかに方法はあるまいとのみ速断して、その結果は朋友に冷かされたり、屑屋流に駒込近傍を徘徊したのである。しかしこんな問題は当人の支配権以外に立つ問題だから、よし当人を尋ねあてて事実を明らかにしたところで不思議は解けるものでない。当人から聞き得る事実その物が不思議である以上は余の疑惑は落ちつきようがない。昔はこんな現

象を因果いんがと称となえていた。因果は諦あきらめる者、泣く子と地頭には勝たれぬ者と相場がきまつていた。なるほど因果と言ひ放てば因果で済むかも知れない。しかし二十世紀の文明はこの因いんを極きわめなければ承知しない。しかもこんな芝居的夢幻的現象の因を極めるのは遺伝によるよりほかにしようはなかうと思ふ。本来ならあの女を捕つかまえて日記中の女と同人か別物かを明あきらにした上で遺伝の研究を初めるのが順当であるが、本人の居所さえたしかならぬただいまでは、この順序を逆にして、彼らの血統から吟味して、下から上へ溯さかのぼる代りに、昔から今に繰くり上げて来るよりほかに道はあるまい。いずれにしても同じ結果に帰着する訳だから構わない。

そんならどうして兩人の血統を調べたものだろう。女の方は何者だか分らないから、先まず男の方から調べてかかる。浩さんは東京で生れたから東京っ子である。聞くところによれば浩さんの御父おとつさんも江戸で生れて江戸で死んだそうだ。するとこれも江戸っ子である。御爺おじいさんも御爺おとつさんの御父おとつさんも江戸っ子である。すると浩さんの一家は代々東京で暮らしたようであるがその実町人でもなければ幕臣でもない。聞くところによると浩さんの家は紀州の藩士であったが江戸詰で代々こちらで暮らしたのだそうだ。紀州の家来と云う事だけ分ればそれで充分手懸てがかりはある。紀州の藩士は何百人あるか知らないが現今東京に出

ている者はそんなに沢山あるはずがない。ことにあの女のように立派な服装をしている身分なら藩主の家へ出入りをするにきまつている。藩主の家に入るとすればその姓名はすぐに分る。これが余の仮定である。もしあの女が浩さんと同藩でないとするとその事件は当分埒があかない。抛つて置いて自然天然寂光院に往来で邂逅するのを待つよりほかに仕方がない。しかし余の仮定が中るとすると、あとは大抵余の考え通りに発展して来るに相違ない。余の考によると何でも浩さんの先祖と、あの女の先祖の間に何事かあつて、その因果でこんな現象を生じたに違いない。これが第二の仮定である。こうこしらえてくるとだんだん面白くなってくる。単に自分の好奇心を満足させるばかりではない。目下研究の学問に対してもつとも興味ある材料を給与する貢獻的の事業になる。こう態度が変化すると、精神が急に爽快になる。今までは犬だか、探偵だかよほど下等なものに零落したような感じで、それがため脳不愉快の度をだいぶ高めていたが、この仮定から出立すれば正々堂々たる者だ。学問上の研究の領分に属すべき事柄である。少しも疚ましい事はないと思ひ返した。どんな事でも思ひ返すと相当のジャスチフィケーションはある者だ。悪るかつたと気がついたら黙坐して思ひ返すに限る。

あくる日学校で和歌山県出の同僚某に向つて、君の国に老人で藩の歴史に詳しい人はい

ないかと尋ねたら、この同僚首をひねつてあるさと云う。因つてその人物を承うけたまわると、もとは家老かろうだったが今では家令かれいと改名して依然として生きていると何だか妙な事を答える。家令ならなお都合がいい、平常藩邸ふだんしんぢに出入する人物の姓名職業は無論承知しているに違ちがない。

「その老人は色々昔の事を記憶しているだろうな」

「うん何でも知つている。維新の時などはだいぶ働いたそうだ。槍やりの名人でね」

槍やりなどは下手へたでも構かまわん。昔むかし藩中はんちゆうに起つた異聞奇譚いぶんきたんを、老耄ろうもうせずに覚えていてくれればいいのである。だまつて聞いていると話が横道へそれそうだ。

「まだ家令つとを務めているくらいなら記憶はたしかだろうな」

「たしか過ぎて困るね。屋敷のものがみんな弱つている。もう八十近いのだが、人間も随分丈夫に製造する事が出来るもんだね。当人に聞くと全く槍そうじゆつ術じゆつの御蔭だと云つてる。

それで毎朝起きるが早いか槍やりをしごくんだ……」

「槍やりはいいが、その老人に紹介して貰もらえまいか」

「いつでもして上げる」と云うと傍そばに聞いていた同僚が、君は白山の美人を探さがしたり、記憶のいい爺さんを探したり、随分多忙だねと笑つた。こつちはそれどころではない。こ

の老人に逢いさえすれば、自分の鑑定が中るか外れるか大抵の見当がつく。一刻も早く面会しなければならぬ。同僚から手紙で先方の都合を聞き合せてもらう事にする。

二三日は何の音沙汰もなく過ぎたが、御面会をするから明日三時頃来て貰いたいと云う返事がようやくの事来たよと同僚が告げてくれた時は大に嬉しかった。その晩は勝手次第に色々と事件の発展を予想して見て、先ず七分までは思い通りの事実が暗中から白日の下に引き出されるだろうと考えた。そう考えるにつけて、余のこの事件に対する行動が——行動と云わんよりむしろ思いつきが、なかなか巧みである、無学なものならどうていこな点に考えの及ぶ氣遣はない、学問のあるものでも才気のない人にはこのような働きのある応用が出来る訳がないと、寝ながら大得意であった。ダーウインが進化論を公けにした時も、ハミルトンがクォーターニオンを発明した時も大方こんなものだろうと独りでいい加減にきめて見る。自宅の渋柿は八百屋から買った林檎より旨いものだ。

翌日は学校が午ぎりだから例刻を待ちかねて麻布まで車代二十五銭を奮発して老人に逢つて見る。老人の名前はわざと云わない。見るからに頑丈な爺さんだ。白い髯を細長く垂れて、黒紋付に八王子平で控えている。「やあ、あなたが、何の御友達で」と同僚の名を云う。まるで小供扱だ。これから大発明をして学界に貢献しようとする余に対し

てはやや横柄おうへいである。今から考えて見ると先方が横柄なのではない、こつちの氣位きぐらいが高過ぎたから普通の応接ぶりが横柄に見えたのかも知れない。

それから二三件世間なみの応答を済まして、いよいよ本題に入った。

「妙な事を伺いますが、もと御藩ごはんに河上と云うのが御座いましたろう」余は学問はするが対応の辞にはなれておらん。藩はんというのが普通だが先方の事だから尊敬して御藩ごはんと云つて見た。こんな場合に何と云うものか未だいまに分らない。老人はちよつと笑つたようだ。

「河上——河上と云うのはあります。河上才三と云うて留守居つとを務めておつた。その子が貢五郎と云うてやはり江戸詰で——せんだつて旅順で戦死した浩一の親じやて。——あなた浩一の御つき合いか。それはそれは。いや氣の毒な事で——母はまだあるはずじやが……」と一人で弁ずる

河上一家いっけの事を聞くつもりなら、わざわざ麻布下りあさぶくだりまで出張する必要はない。河上を持ち出したのは河上対某との關係が知りたいからである。しかしこの某なるものの姓名が分らんから話しの切り出しようがない。

「その河上について何か面白い御話はないでしょうか」

老人は妙な顔をして余を見詰めていたが、やがて重苦しく口を切つた。

「河上？ 河上にも今御話しする通り何人もある。どの河上の事を御尋ねか」

「どの河上でも構わんです」

「面白い事と云うて、どんな事を？」

「どんな事でも構いません。ちと材料が欲しいので」

「材料？ 何になさる」 厄やっかい介かいな爺おやさんだ。

「ちと取調べたい事がありました」

「なある。貢五郎と云うのはだいぶ慷慨こうがい家で、維新の時などはだいぶ暴あられたものだ——或る時あなた長い刀を提さげてわしの所へ議論ぎろんに来て、……」

「いえ、そう云う方面でなく。もう少し家庭内に起つた事柄で、面白いと今でも人が記憶きおくしているような事件はないでしょうか」老人は黙もく然ねんと考かんえている。

「貢五郎という人の親はどんな性質せいしやうでしたらう」

「才三かな。これはまた至つて優しい、——あなたの知つておられる浩一こういちに生き写しじや、よく似ている」

「似ていますか？」と余は思わず大きな声を出した。

「ああ、実によく似ている。それでその頃は維新には間まもある事で、世の中も穏おだやかであつ

たのみならず、役が御留守居だから、だいぶ金を使って風流をやったそうだ」

「その人の事について何か艶聞が——艶聞と云うと妙ですが——ないでしょうか」

「いや才三については憐れな話がある。その頃家中に小野田帯刀と云うて、二百石取りの侍がいて、ちようど河上と向い合つて屋敷を持つておつた。この帯刀に一人の娘があつて、

それがまた藩中第一の美人であつたがな、あなた」

「なるほど」うまいだんだん手懸りが出来る。

「それで両家は向う同志だから、朝夕往来をする。往来をするうちにその娘が才三に懸想をする。何でも才三方へ嫁に行かねば死んでしまうと騒いだのだて——いや女と云うものは始末に行かぬもので——是非行かして下されと泣くじや」

「ふん、それで思う通りに行きましたか」成蹟は良好だ。

「で帯刀から人をもつて才三の親に懸合うと、才三も実は大変貰いたかつたのだからその旨を返事する。結婚の日取りまできめるくらいに事が捗どつたて」

「結構な事で」と申したがこれで結婚をしては少々困ると内心ではひやひやして聞いている。

「そこまでは結構だったが、——飛んだ故障が出来たじや」

「へええ」そう来なくつてはと思う。

「その頃国家老くにがろうにやはり才三くらいな年とし恰好かっこうなせがれが有つて、このせがれがまた帯刀の娘に恋慕れんぼして、是非貫ぬいたいと聞き合せて見るともう才三方へ約束が出来たあとだ。

いかに家老の勢でもこればかりはどうもならん。ところがこのせがれが幼少の頃から殿様の御相手をして成長したもので、非常に御上おかみの御氣に入りでの、あなた。——どこをどう運動したのか殿様の御意ぎよでその方の娘をあれに遣つかわせと云う御意が帯刀に下おりたのだけ」

「氣の毒ですな」と云つたが自分の見込が着々あ中あたるので実に愉快でたまらん。これで見ると朋友の死ぬような凶事でも、自分の予言が的中するのは嬉しいかも知れない。着物を重ねないと風邪かぜを引くぞと忠告をした時に、忠告をされた当人が吾が言を用いないでしかもぴんぴんしていると心持ちが悪わるい。どうか風邪が引かしてやりたくなる。人間はかようにわがままなものだから、余一人を責めてはいかん。

「実に氣の毒な事だて、御上の仰せだから内約があるの何のと申し上げても仕方がない。それで帯刀が娘に因果いんがを含めて、とうとう河上方を破談にしたな。両家が従来しゆらいの通り向う合せでは、何かにつけて妙でないとと云うので、帯刀は国詰になる、河上は江戸に残ると云う取り計とをわしのおやじがやったのじや。河上が江戸で金を使つたのも全くそんなこんな

で残念を晴らすためだろう。それでこの事がな、今だから御話しようなもの、当時はぱつとすると両家の面目かかにかか関わりと云うので、内々にして置いたから、割合に人が知らずにいる」

「その美人の顔は覚えて御出おいでですか」と余に取つてはすこぶる重大な質問をかけて見た。「覚えているとも、わしもその頃は若かったからな。若い者には美人が一番よく眼につくようだて」と皺しわだらけの顔を皺しわばかりにしてからからと笑った。

「どんな顔ですか」

「どんなと云うて別に形容しようもない。しかし血統と云うは争われんもので、今の小野田の妹がよく似ている。——御存知はないかな、やはり大学出だが——工学博士の小野田を」

「白はく山さんの方かたにいるでしょう」ともう大丈夫と思つたから言い放つて、老人の気色けしきを伺うと

「やはり御承知か、原町まにいる。あの娘もまだ嫁に行かんようだが。——御屋敷おひいの御姫き様の御相手に時々来ます」

占めた占めたこれだけ聞けば充分だ。一から十まで余が鑑定かんていの通りだ。こんな愉快な事

はない。寂光院はこの小野田の令嬢に違ない。自分ながらかくまで機敏な才子とは今まで思わなかつた。余が平生主張する趣味の遺伝と云う理論を証拠立てるに完全な例が出て来た。ロメオがジュリエットを一目見る、そうしてこの女に相違ないと先祖の経験を数十年の後に認識する。エレーンがランスロットに始めて逢う、この男だぞと思ひ詰める、やはり父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てて脳中に再現する。二十世紀の人間は散文的である。ちよつと見てすぐ惚れるような男女を捕えて軽薄と云う、小説だと云う、そんな馬鹿があるものかと云う。馬鹿でも何でも事實は曲げる訳には行かぬ、逆かさにする訳にもならん。不思議な現象に逢わぬ前ならとにかく、逢うた後にも、そんな事があるものかと冷淡に看過するのは、看過するものの方が馬鹿だ。かように学問的に研究的に調べて見れば、ある程度までは二十世紀を満足せしむるに足るくらいの説明はつくのである。とここまででは調子づいて考えて来たが、ふと思いついて見ると少し困る事がある。この老人の話しによると、この男は小野田の令嬢も知っている、浩さんの戦死した事も覚えてゐる。するとこの兩人は同藩の縁故でこの屋敷へ平生出入して互に顔くらいは見合っているかも知れん。ことによると話をした事があるかも知らん。そうすると余の標榜する趣味の遺伝と云う新説もその論拠が少々薄弱になる。これは兩人がただ一度本郷

の郵便局で出合った事にして置かんと不都合だ。浩さんは徳川家へ出入する話をついにした事がないから大丈夫だろう、ことに日記にああ書いてあるから間違はないはずだ。しかし念のため不用心だから尋ねて置こうと心を定めた。

「さつき浩一の名前をおつしやつたようですが、浩一は存ぞん生しようちゆう中御屋敷へよく上がりましたか」

「いいえ、ただ名前だけ聞いているばかりで、——おやじは先刻せんこく御話をした通り、わしと終夜激論をしたくらいな間柄じやが、せがれは五六歳のときに見たぎりで——実は貢五郎が早く死んだものだから、屋敷へ出入でいりする機会もそれぎり絶えてしもうて、——その後は頓とん逢おうた事がありません」

そうだろう、そう来なくつては辻つじ褻つまつまが合わん。第一余の理論の証明に關係してくる。先まずこれなら安心。御蔭様でと挨拶あいさつをして帰りかけると、老人はこんな妙な客は生れて始めてだとも思つたものか、余を送り出して玄関に立つたまま、余が門を出て振り返るまで見送つていた。

これからの話は端折はしよつて簡略に述べる。余は前にも断わつた通り文士ではない。文士ならこれからが大おお腕前わしを見せるところだが、余は学問読書を専一にする身分だから、こん

な小説めいた事を長々しくかいているひまがない。新橋で軍隊の歓迎を見て、その感慨から浩さんの事を追想して、それから寂光院の不思議な現象に逢ってその現象が学問上から考えて相当の説明がつくと云う道行きが読者の心に合点出来ればこの一篇の主意は済んだのである。実は書き出す時は、あまりの嬉しさに勢い込んで出来るだけ精密に叙述して来たが、慣れぬ事とて余計な叙述をしたり、不用な感想を挿入したり、読み返して見ると自分でもおかしいと思うくらい精しい。その代りここまで書いて来たらもういやになつた。今までの筆法でこれから先を描写するとまた五六十枚もかかねばならん。追々学期試験も近づくと、それに例の遺伝説を研究しなくてはならんから、そんな筆を舞わす時日は無論ない。のみならず、元来が寂光院事件の研究しなくてはならんから、ようやくの事ここまで筆が運んで来て、もういいと安心したら、急にがっかりして書き続ける元気がなくなつた。

老人と面会をした後には事件の順序として小野田と云う工学博士に逢わなければならん。これは困難な事でもない。例の同僚からの紹介を持って行ったら快よく談話をしてくれた。二三度訪問するうちに、何かの機会で博士の妹に逢わせてもらった。妹は余の推量に違わず例の寂光院であつた。妹に逢つた時顔でも赤らめるかと思つたら存外淡泊で毫も平生

と異なる様子ことのなかつたのはいささか妙な感じがした。ここまでではすらすら事が運んで来たが、ただ一つ困難なのは、どうして浩さんの事を言い出したものか、その方法である。無論デリケートな問題であるから滅多めったに聞けるものではない。と云つて聞かなければ何だか物足らない。余一人から云えばすでに学問上の好奇心を満足せしめたる今日こんにち、これ以上立ち入つてくだらぬ詮議せんぎをする必要を認めておらん。けれども御母おつかさんは女だけに底まで知りたいのである。日本は西洋と違つて男女の交際が発達しておらんから、独身の余と未婚のこの妹と対座して話す機会はとてもない。よし有つたとしたところで、むやみに切り出せばいたずらに処女を赤面させるか、あるいは知りませぬと跳ねはつけられるまでの事である。と云つて兄のいる前ではなおさら言いにくい。言いにくいと申すより言うを敢てあえすべからざる事かも知れない。墓参り事件を博士が知っているならばだけけれど、もし知らんとすれば、余は好んで人の秘事を暴露ばくろする不作法を働いた事になる。こうなるといくら遺伝学を振り廻しても埒らちはあかん。自ら才子だと飛び廻つて得意がった余も茲ここに至つて大に進退に窮した。とどのつまり事情を逐一ちくいち打ち明けて御母さんに相談した。ところが女はなかなか智慧ちえがある。

御母さんの仰せおほには「近頃一人の息子を旅順で亡くして朝、夕淋さみしがって暮らしている

女がいる。慰めてやろうと思つても男ではうまく行かんから、おひまな時に御嬢さんを時々遊びにやつて上げて下さいとあなたから博士に頼んで見て頂きたい」とある。早速博士方へまかり出て鸚鵡的おつむ口吻こうふんを弄ろうして旨むねを伝えると博士は一も二もなく承諾してくれた。これが元で御母さんおつかと御嬢さんとは時々会見をする。会見をするたびに仲がよくなる。いっしょに散歩をする、御饌ごせんをたべる、まるで御嫁さんのようになった。とうとう御母さんが浩さんの日記を出して見せた。その時に御嬢さんが何と云つたかと思つたら、それだから私は御寺参おてらまいりをしておりますと答えたそうだ。なぜ白菊を御墓たまへ手向たむけたのかと問い返したら、白菊が一番好きだからと云う挨拶であつた。

余は色の黒い將軍を見た。婆さんがぶら下がる軍曹を見た。ワーと云う歓迎の声を聞いた。そうして涙を流した。浩さんは塹壕ざんこうへ飛び込んだきり上あがつて来ない。誰も浩さんを迎むかへに出たものはない。天下に浩さんの事を思っているものはこの御母さんとこの御嬢さんばかりであろう。余はこの兩人の睦むつまじき様さまを目撃するたびに、將軍を見た時よりも、軍曹を見た時よりも、清き涼しき涙を流す。博士は何も知らぬらしい。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：LUNACAT

2000年9月11日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

趣味の遺伝

夏目漱石

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>